

2632
104

野澤正浩
友納友次郎
共著
卷二

修
尋常小學讀本教授細案

東京目黒書店發兌



始



2632

104

野澤正浩
友納友次郎
共著
卷二

修正尋常小學讀本教授細案

東京目黒書店發兌

263-104

野澤正浩
友納友次郎
共著
卷二

修正尋常小學讀本教授細案

東京目黒書店發兌

大正
7. 8. 17
内交

東京目黒書店發兌
修正尋常小學讀本教授細案
共著 卷二

修正小學讀本教授細案 卷二

目次

總說	一
本書編纂の特色	一
讀本内容の概観	二
各説	九
五十音竝に濁音半濁音	九
第一 ニハトリ	一〇
第二 日ノデ	二六
第三 カトウキヨマサ	三三
第四 トラトキツネ	三七
第五 月	三九
目次	一

第六	川	九二
第七	ヨクノフカイ犬	一〇六
第八	サルト月	一一九
第九	木ノハ	一二三
第十	ユフガタ	一五〇
第十一	カクレンボ	一五五
第十二	イシヒロヒ	一八一
第十三	ナヅ	一九八
第十四	シンネン	二〇八
第十五	ユキダルマ	二二七
第十六	タコノウタ	二四三
第十七	ネズミノサウダン	二五四
第十八	子ウシ	二七二
第十九	天ジンサマ	二八九
第二十	ニンギヤウ	三〇五

目

次終

目次

第二十一	オトウト	三二八
第二十二	ワタクシノエホン	三三四
第二十三	花サカヂヂイ(一)	三四九
第二十四	花サカヂヂイ(二)	同
第二十五	花サカヂヂイ(三)	同

修正尋常小學讀本教授細案 卷二

友納友次郎 共著
野澤正浩



本書編纂の特色

本書は修正尋常小學讀本卷二を教授するに當り、教師の參考に供せんがために編纂したものである。

本書は先づ教材の要旨を明かにし、次に各課に於ける教材の區分を適切に定め、次に教具を詳記し、次に此の教材は如何に取扱ふべきかを其の性質要求に基き、國語教授の思潮・經驗等に顧みて、最も穩健に詳述し、教材の運轉活用に對して、其の指針を與へ、毎時に於ける教授の實際例をも添加して、専ら讀本教授の本領發揮に努

總說 本書編纂の特色

めた。最後に備考として教材の形式、内容に關し、最も必要と認めるものを掲載して、教授者の参考に提供した。

讀本内容の概観

教材研究即ち讀本の内容調査は讀本教授上に於ける根本的要件である。教材の程度、分量を知り、精神要求を捉へ、教授の方針態度を定めるには、一に此の内容調査に俟たなければならぬ。若し此の調査にして不十分ならんか、如何に方法に巧みでも、それより得る効果の極めて小なることは言ふまでもない。故に修正せられたる本卷の内容を示すことは此の根本的要求に對し、忠實なる態度の表現である。併し茲に精しく示すことは事情の許さぬ所もあるから、左に修正趣意書に基き、最も注意すべき諸點だけを抄録して、参考に供することにする。

一、分量の増加 我が國の讀本は之を西洋諸國の讀本に比べると、分量に於て餘程の懸隔がある。これは漢字教授といふ特別な厄介物があるからである。従つて分量の増加に對しては餘程顧慮しなければならぬ。編者は地方の實情に問ひ、尙多少増加の餘地あることを認め、約二割の増加を試みてある。併し此の増加は

多く練習文の上に表はれてゐるから、之がため新に兒童の負擔を重くしたと言ふ憂がない。編者の精神は之により多讀の機會を多く與へ、知識の擴充を圖り、讀書趣味の養成に資しようといふのにある。故に實際教授の際はよく此の精神を酌んで有効に授ける所なくてはならぬ。

二、文字の提出 第一卷に於て五十音全部を教へたるを以て、本卷に於ては、之が練習を行ふと同時に、拗音・長音・拗長音を加へ、假名にて總べての發音を表し得るに至らしめるを期し、且漢字教授の第一階段として、簡易なる漢字三十三と讀替漢字三とを提出してある。また既習漢字の應用として、最も普通な姓氏をも列記してある。新出漢字及び讀替漢字は次の如くである。而して練習文には新字を提出しないといふ方針であるから右表中第四・八十三・二十三・二十四・二十五課は練習文で、そこに新漢字の配當がない譯である。併し趣意書には兒童の熟知せる人名地名等で、既習文字を以て表はし得るものは其の應用に慣れしめたらよいといふ考も見えて居るから、このやうな練習文の末尾にそれ等を附帶し、漢字の適用に習熟させるのも價值ある方法である。

漢字	讀替	新出漢字		種類	課
		字	出		
			日		1
			人		2
			大		3
			口		4
			月		5
			川		6
			犬		7
					8
			木		9
			火		10
			上		11
			石		12
					13
			子		14
			目		15
			天		16
			米		17
					18
			白		19
			入		20
			手		21
			正		22
					23
					24
					25

三、教材の選擇 分量の増加に伴ひ教材も自然に増加したから、其の選擇も自ら

多方面に互つて居る。修正の一般的方針上からは、

- 1 兒童の日常生活に關するもの、
- 2 田園趣味を養成すべきもの、
- 3 理科及び實業に關するもの、
- 4 經濟及び公民の心得に關するもの、

5 國勢の現状世界の事情に通せしむべきもの、

の方面から特に増加するの計畫が立ててある。今本書につき新に加へられたもの、改作されたもの、練習文に屬するものを掲げれば次の如くである。

課	題	課	題	課	題
一	ニハトリ 日ノテ	二	○カクレンボ ◎イシヒロヒ	三	◎オトウト ○ワタクシノエホン
二	◎カトウキヨマサ *トヲトキツネ	三	*ナゾ シンネン	三	*花サカサゲイ(一)
三	月	四	ユキダルマ	三	*花サカサゲイ(二)
四	○川	五	タコノウタ	三	*花サカサゲイ(三)
五	ヨクノフカイ犬	六	◎ネズミノサウダン		
六	*◎サルト月	七	*子ウシ		
七	木ノハ	八	天ジンサマ		
八	エフガタ	九	◎ニンギヤウ		
九		十			

◎改作
○新材料
*練習文

以上の表について見ると、本巻は餘程舊態を改め面目を新にして居ることがわかる。取扱ふ上に餘程工夫を要すると同時に、是等の新しい特色を捉へて教授することは新來の愉快でもある。而して右教材中童話寓話等にして、其の出典のある

ものは次の如くである。

課	題目	出典
第三課	加藤清正。	常山紀談其の他に據る。
第四課	虎と狐。	今昔物語。イソップ物語等。
第七課	慾ノ深イ犬。	イソップ物語。
第八課	猿と月。	僧祇律に基ける話。諸書に出づ。
第十七課	鼠の相談。	イソップ物語
第二十三課		童話。
第二十四課		
第二十五課		

である。是等の課の内容はこれ等の出典に依つて十分調査し、其の精神要求を捉へ、以て實質的方面の陶冶を全うしなければならぬ。

教材の取扱に關しては毎課々々について、其の精神要求の存する所を十分察しなければならぬが、今編纂趣意書に表はれて居るものを抄記せば次の如くである。

1 第十四「新年」の課の末尾に掲げてある月日に於て

四月二十九日——は皇太子殿下御誕辰。
 六月二十五日——は皇后陛下御誕辰。
 八月三十一日——は天長節。
 十月三十一日——は天長節祝日

- 1 國民的意義を有する月日であるから、其の考で取扱はなければならぬ。
- 2 第十五「雪達磨」の課は全文會話から成り、其の間に事件の進行變化を示したものである。敘事の一形式として注意するを要する。
- 3 第二十二「私の繪本」の課は既出の材料を應用したものであるから、兒童の記憶を辿り、話方の練習を試みるもよい。
- 4 第二十三、二十四、二十五「花咲爺」の課は練習のため、努めて既出の文字を應用したものである。故に地方の情況によつては、單に兒童の自習に委するも可である。其の運用に關しては一に教授者の研究に俟つのである。
- 5 本巻に提示したる漢字中特に讀方に注意すべきものは次の如くである。

中(二七頁) ナカ 月(日三五頁) ツキニチ 一(月六六頁) イツキ

以上はホンの四五課についての告知であるが、こんな要求注意は其の他の課にも

ある譯であるから、十分考察して遺漏なく取扱はなければならぬ。

四、挿繪 挿繪については舊讀本は兎角是非の批評があつたが、修正讀本は之に顧み大に改善を施してある。即ち

- 1 兒童の性情に顧み、一層活動的に描いたこと。
- 2 洋畫風を加味して新趣を添へたこと。
- 3 印刷術の進歩を利用して濃淡を分ち、色彩を施すことの出來ぬ缺點を補つたこと。

等は大に注目すべき點である

要するに本卷は形式上から見ても、内容上から見ても、舊卷に比し幾多の特色と價值とを表はして居る。實際教授に當つては、それ等の點をよく諒知し、編者の精神のある所を察し、以て本書の要求を十分發揮するやう努力しなければならぬ。

各 說

五十音竝に濁音・半濁音

卷頭に五十音竝に濁音・半濁音の音圖が掲げてあるが、これは本書第一課の教授に入る前に、約一時間を割いてこれが發音及び書方の練習をなし、其の後は折々此の音圖につき發音の練習をなし、斯くして常に正確なる發音をなすやう注意するがよい。而して其の練習法は大體次の如く行つてよい。

一、音圖表を用ひての練習。

1 行系に従つての練習。

(イ) 發音—順に逆に。 (ロ) 書方。

2 列系に従つての練習。

(イ) 發音—順に逆に。 (ロ) 書方。

3 行列を逐はずにの練習

(イ) 發音。 (ロ) 書方。

各說 五十音竝に濁音・半濁音

(注意)③の場合には發音に於ては主として「イ」と「エ」。「ヒ」と「シ」。「キ」と「チ」。「シ」と「ス」。「チ」と「ツ」。「ノ」と「ト」。「ラ」と「ド」。「レ」と「デ」。「ロ」と「ド」等につき書方に於ては主として「エ」と「エ」。「ウ」と「ウ」。「シ」と「ン」。「ス」と「ム」。「ソ」と「ン」。「メ」。「ツ」と「シ」。「ヌ」と「ス」。「ア」と「マ」。「ワ」と「ウ」等につき練習するがよい。

(2)の場合には主として五十音圖につき練習するがよい。

二、音圖表を用ひないでの練習。

1 行系に從つての暗誦。

(イ)發音—順に逆に。(ロ)書方

2 列系に從つての暗誦。

(イ)發音—順に逆に。(ロ)書方

(注意)此の場合の練習は主として五十音だけに行ふ。

第一 ニハトリ

要旨

形式上—「ニハトリ」「ワタクシ」「マイアサ」「ハヤク」「サマシマス」「デナイ」「ナンベン」「ウ

タ」「ダンダン」「オキテキマス」等の語句の意義用法。漢字「日」の讀方、書方。「ニハトリ」「ウタヒマス」「オキテ」の假名遣等を授け、擬人法で記された文章の讀解に習熟せしめる。

内容上—雞の形態、常習を知らしめ、兼ねて早起の習慣の貴ぶべきことを感得せしめる。

区分

第一時 第一・二節(自二頁一頁一行)の形式及び内容の教授。

第二時 第三節(自二頁四行)の形式及び内容の教授。

第三時 全文の復習及び應用。

教具

雞の標本。挿繪を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、雞はどんな山奥の里にでも又孤島の漁る村にでも、廣く飼はれて居る家禽の一種である。従つていづこの子供にも親しみのある材料である。本課は之

を以て教材としたことは頗る適當であることを認める。殊に雞が時を告げるといふ奇習を捉へて文にしたことは、其の着想が頗る面白いと思ふ。

二、文章は擬人法によつて敘述されてある。擬人法は生物又は無生物を人間化したもので、尋一二といふ發達階梯にある兒童にはよく其の性情に適合した敘述法である。

三、擬人的文章は擬人的其の儘の形に於て取扱つて見たい。これをば雞は事實に於て人間のやうな物語をするものでない。それを茲には假りに人間と見做して斯く書いたのであるとか。或は「ワタクシハハヤクメヲサマシマス」といつても、雞は人間の様に意識して目を覺ますものでない。それは彼の本能的生活であるとかいふやうに、知的に還元して取扱ふことは可成避けたいと思ふ。勿論斯く言つても知的交渉を全然斷切つて仕舞ふといふのではない。

「ワタクシハ——」とは雞は自分自身をいつてゐるのである。
「ウタヲウタヒマス——」とは雞がコケコッコウといつて鳴く、其のことをいつてゐるのである。

といふ様に、多少知的態度が加はつても、彼を人間化した點即ち擬人的性格を

失はないやうにして取扱ふのである。これが擬人的文章を取扱ふとして大切な點と信じて居る。

四、本課の内容については理科教授の様に、頭は、嘴は、羽は、脚は、———といふやうに授ける必要が無い。大體

形態——總合的に直覺して之は雞であるといふことが分ればよい。

雌雄——之も總合的に直覺して之は雄、之は雌といふことさへ分ればよい。

飼養——人家に飼養して居る。彼等の寢起する所を鳥屋トリヤといふ。鳥屋は大抵家の内の一隅に設けてある。晩方になると此處にとまり、翌朝早く此處から下りて終日地上にゐて食物を求め。

(注意)此處で簡單に挿繪にある鳥屋の構造について説明するがよい。

習性——雄は性勇氣に當み、雌は性温順である。雄は毎朝時を告げる奇習あるが、雌は只叫聲を出すのみである。雌雄共に雛に對する愛情深く、殊に雌は自己の身命を賭して、雛を保護するの習性を有して居る。

位の範圍に於て、彼等の日常の觀察と經驗とを主にして整理することにしたらい。そして最後に本課を通じて早起の必要と、利益とを簡單に知らしめ、

この習慣の成立に努めるがよい。

五、文字語句については、大體次に示す所に基き、兒童の發達に顧み、適切に知らしめねばならぬ。

「ワタクシ」——都會地の兒童にはなんでもないが、山間僻地の兒童にあつては、其の土地に使用して居る自稱代名詞と結合して知らしめることにするがよい。「ワタクシ」は畧して「ワタシ」或は「ワシ」ともいひ、他人に對し、自分を卑下して云ふ代名詞である。併し茲に於ける「ワタクシ」は雞が自分自身をいつたのであるといふことを知らしめるがよい。

「マイアサ」「ハヤク」——は共に「メヲサマシマス」を限定した詞である。これは

1 メヲサマシマス。

2 マイアサ、メヲサマシマス。

3 マイマサ、ハヤク、メヲサマシマス。

の如く三つの場合を比較して其の職能を知らしめるがよい。

「メヲサマシマス」——は自然に覺めるのでなく、努力して覺ますのであるといふ意味に取扱ふのがよい。

「日ノデナイウチニ、ナンベンモウタヲウタヒマス」——雞は太陽のまだ出ない内、即ち大概午前三時頃から夜の明方まで、三回鳴いて時を告げる。俗に之を一番雞、二番雞、三番雞といつて居る。「ナンベンモ」は「ウタヲウタヒマス」を限定して居る詞で、此の職能は

1 日ノデナイウチニ、ウタヲウタヒマス。

2 日ノデナイウチニ、ナンベンモウタヲウタヒマス。

と兩々比較して知らしめるがよい。「ウタ」は雄のコケコッコウと鳴くを意味するのであるが、前にも言つた如く、擬人化した所を破らず、私は毎朝日のまだ出ぬ内に「コケコッコウ」といつて幾遍も歌を歌ひます」といふ風に知らしめるがよい。

「キクト」——の「ト」は條件の關係を示す助詞である。適用と相俟つて十分理會させるがよい。

「ダンダン」——は先づ母が起き、次に父が起き、次に太郎が起き、それからお千代が起きると言ふ風に具體的に知らしめるがよい。而して此の詞は「オキテキマス」を限定して居るから、

1 ヒトガオキマス。

2 ヒトガダン、ダン、オキテキマス。

と相比較して其の職能を意識させるがよい。

「ニハトリ」ウタヒマス「オキテ」は假名遣に注意する。「ワタクシ」は「ボク」「ワタシ」等と比較して授ける。「ハヤク」と「ソク」。「メヲサマシヤス」と「メガサメマス」。

「ニベン」「ニヘン」と「ナンベン」。「デナイ」と「デル」等も同様である。

「日」象形文字で、太陽を象つたものである。轉じて其の光熱晝日數曆等の義にも用ひる。漢音は「ジツ」吳音は「ニチ」で訓は「ヒ」である。運筆の順序は「一」「二」である。

六、文章について一通りの取扱が終つた後、教師は批判的に次の如くいつて、一層深く其の内容を玩味させるがよい。

第一節に於て——雞が「私は毎朝早く目を覺まします」といふとは眞實の言葉である。彼は人のまだ誰も起きない内に、ちやんと時をきめて目を覺まし、どんな雨風の朝でも、違ふこともなければ怠ることもない。本當に感心な鳥である。私等もこの雞のお話を聞いて毎朝早く起る所の習慣をつくりたいものである。

である。

第二節に於て——雞は、私は日の出ない内に何遍も歌を歌ふ」と言つてゐるが、成程此の鳥は、諸子がまだ盛に夢でも見てゐる内に早や目を覺まし、時を告げる時に先づ勇しく羽ばたきをして、一番時を告げ、それが程置いて二番時を告げ、それからまた程置いて三番時を告げる。静かな闇を眞先に破る聲は本當に勇しい。

第三節に於ては——雞は、私の歌を聞くと人がだん／＼起るといつてゐるが之も事實である。人は雞の聲を聞くと、さあ、雞が鳴いた、起きなければならぬといつて、お母さんが起き、お父さんが起き、臺所には水汲む音、座敷には雨戸を繰る音、神を拜する拍手、道行く人の話聲、車の音、世がだん／＼騒しくなつたとき、太郎も起き、お千代も起き、赤坊も泣くといふ譯である。毎朝々々眞先に起るものは雞であつて、此の聲を聞くと人がだん／＼起るのである。實際雞の聲を聞くと、どうしても寢てゐる譯にいかぬ感じがする云々。

要するに此の擬人文を通して曉の氣分を味はさせると同時に、早起の必要を自分で感ずるやうに説話するのである。

七、本課に於て習得した文字語句は可成多方的に練習又は應用して、それ等の意義用法に習熟させるがよい。左にその二三の場合を示して資料に供しよう。

1 漢字の練習(書取法)

「アサ日」 「日サマ」 「日ガデタ」 「日トツキ」…等。

2 語句の適用填充法書取法短文作爲

「ハヤク」―ワタクシハマイアサハヤクオキマス。 「日ノデナイウチニ」―オカアサンハマイアサ日ノデナイウチニオキマス。 「ナンベンモ」―ワタクシハナンベンモホンヲヨミマス。 「ダンダン」―ツキガダン、ダンノボツテキマス。 「キクト」―コドモガカネノオトラキクトアツマツテキマス。

3 假名遣の練習書取法誤正法

「ニハトリ」 「ウタヒマス」 「オキテキマス」 「ワタクシ」…等。

(注意)②に於て短文作爲とは適用すべき語句を與へて、兒童をして創作的に短文を綴らしめるのである。しかし此の方法は優等生に可能なるも一般兒童には困難である。故に一般に對しては内容を與へて綴らしめる方法に出るのがよい。書取法とは教師がある語句を適用して作つた短文を口唱して書

取らしめ、後之を讀ましめて、そこに適用すべき語句の適用しあることを知らしめ、其の適用を意識せしめるのである。(3)に於て誤正法とは教師が態と假名遣の誤つた語句を書板し、之を兒童をして批正せしめ、或は一兒童をして教師の口唱を塗板上に書取らしめ、其の誤を他の兒童をして批正せしめ、斯くして正しい假名遣を知らしめる方法をいふのである。以下も之に倣ふ。

八、讀書力の増進を圖るため、讀書趣味を養ふため、彼等の既に習ひ得た國語の力を以て、讀むことの出来る補習文を作爲して、讀ましめることは頗るよいことである。私共は此の方に大に力を注いで見たいと思ふ。左に其の文例を示して資料に供して置かう。

○スズメ

ワタクシ ハ マイアサ ハヤク メ ヲ サマシマス。
ヨ ガ アケル ト、 スグ ネドコ カラ デテ、 カハラ ノ ウヘ デ
ウタ ヲ ウタヒマス。
ワタクシ ノ ウタ ヲ キクト ト、 トモキチサン モ、 オチヨサン
オキテ キマス。

九、挿繪は修正の方は舊よりも擴大もしてあるし、また陰影によつて闇をも現はしてあるから、兒童に其の實況を想像させるに都合がよい。儘かに一進歩である。

(乙)教授の實際

第一時

一、實物及び掛圖の觀察

鶏の雌雄の標本、挿繪を擴大した掛圖を觀察させて、鶏の形態習性、鳥屋及び曉に時を告げ居る有様等につき問答して、それ等に關する思想を整理する。

二、通讀

今から讀む文章は曉に於ける雞の物語であることを告げ、各自をして自由に一・二回讀ましめる。

三、文字語句の教授

通讀したる後、分らぬ所を質問させ、また教師よりも質問して、次の文字及び語句の意義を明かにする。

「ワタクシ」「マイアサ」「ハヤク」「メヲサマス」「日ノデナイウチニ」「ナンベンモ」「ウタ」「ウタヒマス」…等。「日」の書方。

四、讀方練習

各節に、また纏めて、五六の兒童に讀ましめ、また齊讀をもさせる。

五、語句の比較及び假名遣

「ハヤク」と「オンク」「メヲサマシマス」と「メガサメマス」「一ベンニヘン」と「ナンベン」「デナイ」と「デル」…等の語句を比較して其の意味を明かにする。また「ニハトリ」「ウタヒマス」の假名遣をも確實に記憶せしめる。

六、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、文字及び語句等の復演

既に授けたる文字、語句の意義、假名遣等につき復演して、其の意義を一層確實に識得せしめる。

八、文意の考察玩味

各節に於ける意義を適切なる問答法によつて、先づ兒童をして考察せしめ、次

に教師が批評的に説話して、其の内容を味はせる。

九、朗讀

個人的に二三兒童をして朗讀せしめる。

(注意)朗讀に就ては、音聲の緩急、言語の明否等につき十分批評するがよい。

一〇、語句の適用

「ハヤク」「サマシマス」「デナイウチニ」「ナンベンモ」「ウタヒマス」……等の語句を填充法、書取法、又は短文記述によつて、之が用法に習熟せしめる。

第二時

一、復習

前に習つた所を内容形式の兩面に互り要點を復習する。

掛圖により形態習性鳥屋曉の様子等につき問答。一兒童をして朗讀せしめる。語句内容につき問答。

二、通讀

本日引續き雞の物語について學ぶべきを告げ、各自をして自由に一讀せしめ

る。

三、語句の教授

通讀したる後分らぬ所を質問せしめ、また教師よりも質問して、次の語句の意義を明かにする。

「ウタ」「ダンダン」「オキテキマス」……等。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

五、語句の比較及び假名遣

「オキテキマス」と「オキマス」「ヒトガオキテキマス」と「ヒトガダンダンオキテキマス」……等の語句を比較して其の意味を明かにする。また「オキテ」の假名遣を確實に識得せしめる。

六、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、語句内容の復演

本日授けたる語句内容につき復演して、其の意義等を一層確實に意識せしめ

る。

八、内容の玩味

文意を適切に問答して、先づ兒童をして考察せしめ、次に教師が批評的に説話して、其の内容を味はせる。

九、朗讀

二三の兒童をして朗讀せしめる。(音聲の緩急言語の明否につき批正)

一〇、語句及び文形の適用

「ダンダン」「オキテ」「○○○ガネコノコエヲキクト、ニゲテイキマス」……等を
填充法書取法又は短文記述によつて之が用法に習熟せしめる。

第三時

一、全文の復習

1. 各節毎に讀ましめる。2. 語句及び各節の内容につき問答。3. 全文を讀ましめる。4. 語法及び假名遣等につき問答。

二、話方

難の物語につき意識したところを話さしめる。(話術につき指導)

三、練習應用

1. 語句の適用

「ハヤク」「ナンベンモ」「ダンダン」……等(填充法又は短文作爲にて)

2. 文形の適用

○……ガ……ノ……ヲ……ト……

イヌガボクノカホチミルトハシツテキマス。

アカンボガオカアサンノカホチミルトソラヒマス。

3. 全文の書取

(注意劣等生には(1)と(2)を省き最初から全文を書取らしめる。

四、補習文の讀解

1. 各自をして一讀せしめる。2. 語句及び文の内容につき問答。

3. 朗讀(個人的に又一齊的に)

(注意)補習文は教授上の注意の部にあり参照ありたい。而してこれが取扱は教師は豫め塗板に書いて置き、それを提出して讀ましめるか。或は謄寫板にて謄寫したるものを渡してそれを讀ましめるか。或は教師が口唱して書取

らしめそれを讀ましめるか。いづれかの方法を執るがよい。若し補習文に對する時間なき場合は別に適宜の時間をとるも差支ない。それは本細案はそれだけの餘裕を残してあるからである。以下も之に倣ふ。

備考

雞は元來野棲の鳥なりしも、今は家禽として廣く飼養するに至つた。體は肥大にして羽小さく頭上に鷄冠を有する。雄鳥の鷄冠は大きく雌鳥のは小さいのを普通とする。體色は種々あれども雄の一般に雌よりも美麗である。尾は雄のは長く弓狀をなして垂れて居れども、雌のは短い。雄は脚に距を有するが雌には無い。性質に於ても雌雄異なり、雄は勇氣に當み、争鬪を好めども、雌は温順でよく雄と和する。雄は時を告げる奇習を有するが、雌は只叫聲を發するのみである。雌雄共に雞に對する愛情深くあるが、就中雌は其の身を忘れて保護愛育する。雜食性の鳥で、動物植物礦物いづれも其の食とする。砂礫陶器片硝子片などを食するは其の胃中の食物の消化に對し、器械的に作用せしめんがためである。雞は巢を造る能力のない鳥であるが、飼養するには適宜之を造つて與へるを要する。之を鳥屋といつて居る。鳥屋は綿密に造らざると、往々蛇・鼯鼠等に襲はれることがある。飼養の目的は主として産卵用にはた食用に供するにある。

雞の五徳——韓詩外傳に「田饒、魯の哀公に謂つて曰く、君かの雞を見ずや。頭に冠を戴けるは文なり。足距を搏つは武なり。敵前に在つて敢て闘ふは勇なり。食を見て相呼ぶは仁なり。夜を守つて時を失はざるは信なり。是之を雞の五徳と謂ふとある。つまり雞には文・武・仁・勇・信の五徳があるといふことになる。別に之を教へるの意味ではないが、補習文を作るときこんな故事を材料とし、之を擬人化して作爲するも面白からうと思ひ茲に附記した譯である。

第二 日ノデ

要旨

形式上「日ノデ」「ソラ」「マツカニ」「イマ」「ミテキルウチニ」「アア」「モウ」「スツカリ」「アリマセンカ」「デキマセン」等の語句の意義用法。漢字「人」の讀方書方。「ミテキル」「モウ」「オソク」の假名遣等を授け、日の出の光景を記述したる文章の讀解に習熟せしめる。
内容上——日の出の雄大壯美の光景に觸れしめ、傍ら前課と相提携して、常に早起することを勸奨する。

区分

- 第一時 第一・二・三節(自二頁終五行)の形式及び内容の教授。
- 第二時 第四節(自四頁始三行)の形式及び内容の教授。
- 第三時 全文の復習及び應用。

教具

各説 第二 日ノデ

掛圖(挿繪を擴大し之に色彩を施したるもの)

教法

(甲)教授上の注意

一、前課は雞の奇習を擬人化した文章を通して、早起の必要を暗示したのであつたが、本課は日の出の雄大壯美なる光景に觸れしめると同時に、表面的に早起の必要を獎勵したのである。故に本課は此處に要求を置いて取扱はなければならぬ。

二、本課の内容は兒童の經驗と相交渉して、

(一) 日の出の美觀——先づ東天が白む。段々黄色になる。紅に變はる。光線が放射して彷徨ふ雲が美しく色彩する。やがて金色の太陽が悠然と現はれ、燦然と輝くといふ此の雄大壯美なる自然の大觀につき。

(二) 早起の必要——而して此の雄大壯美の大觀に接するにはどうしても、朝早く起きなければならぬ。遅く起る人は逆も此の大觀に接することが出来ない。の範圍内で平易に整理したらよい。

三、併し眞の美感の説いて決して起るものでない。其の實景に觸れしめなければならぬ。故に本課を授ける前に豫め兒童と約し各自が早く起きて、適宜の場所に於て、日の出の光景を實際に観ることにして置く。而して其處に得た實經驗の想起と相俟つて如上の内容に活かしめるといふ方法を執る。此の經驗の復現といふことは本課に於ける大切な要件である。

四、實際家の中には本文章を授けた後各自をして其の實光景に觸れしめてもよいといふ人もあれども、之は文章に對する説明的直觀といふものでよろしくない。私共はどうしても本課を授ける二三日前に兒童と約して各自をして其の實光景に觸れしめ置き、然る後之を取扱ふといふことに主張したい。さうしないと折角の内容が形式と抱合ふて活きて來ないのである。尙本文を取扱ふには本課の挿繪を擴大し、之に色彩りした其の掛圖をも提示し、一面には自然の縮小を其處に觀るの用に供し、一面には説明の及ばぬ所をそれによつて補ふといふことにもしたい。

五、本文章は其の構想上から眺めて、日の出に對し一人の獨語とも見られるし、また誰か對者にそれを語つて居るものとも見られる。併し私共の考は太郎は

いつもの如く早く起きて郊外に散歩し、今朝初めて伴れだつて来た次郎に、いま朝暎が上る天地の大観について語つてゐる場合として取扱つて見たいのである。獨語とするよりも此の方が適當で而も感興が深いと思ふ。

六、文字・語句については大體次に示す所に基き平易に説きて知らしめる所ありたい。

「日ノデ」まだ方角の觀念がなく、従つて東の空云々といつても分り悪いだらうから、事實と結合して「日ノデ」とは朝お日様が山の端(海の上)から上り出るところをいふのであるといふ意味に取扱つて置く。また前課で「日ノデナイウチ」といふことを習つてゐるから、之と比較して一層其の意味を明かにしたらよい。

「アチラ」方向を指示する遠稱代名詞である。「コチラ」と相比較して其の意味を明かにしたらよい。

「ソラ」實際と結合して、其の意味を知らしめる。別に他の言葉を以て説明することは要らぬ。

「マツカニナリマシタ」マツカは、マアカの轉約で、マはその色の眞に濃厚なの

を表はすための接頭語である。濃淡を異にする二三種の赤色を示し、直覺的に其の觀念を與へることにしたらよい。「ナリマシタ」は現在完了で、即ち太郎が東天を眺めて居た所が、白む空が黄色になり、黄色が變じて淡紅になり、淡紅變じて遂に眞紅の色を呈現したといふ其の時間的進行の完了である。此の點はよく注意すべきである。

「イマ」今又は今すぐにの意である。朝暎がちよいと顔出した所に思を置かしめるがよい。

「ミテキルウチニ」現に今見て居る間の意で、燦然たる金鳥が悠々と上る所に想を動かしかしめるがよい。

「ダンダンアガツテキマス」金色の朝暎が悠々迫らず次第々々に上る其の雄大な壯嚴な光景は、眞に我を忘れて其の大観に没入する時である。此處は語らずして、彼等の經驗の追想によつて、味はせたいものである。

「アア」此の語は廣く感ずる時に發する聲。種々の場合に適用して其の意味と應用に習熟させるがよい。

「モウ」二つの意味がある。(一)は事物の動作が將に既往に屬せんとする場合

で、(二)は事物の動作が完了して只今は既往に屬する場合である。本課は乙者の場合である。之も適用によつて十分意味と用法に習熟させるがよい。假名遣にも注意する。

「スツカリ」ノ「コラズ」ミンナと對照して知らしめるがよい。「イマ日ガデマス」ト言ふ所から「モウスツカリデマシタ」といふ所までは、初め太陽がらよつと顔を出し、それから弓形に、それから楕形に、それから半圓にといふ風にだんく體を現はし、遂に全體を現はした其の有様を時間的に記述した所であるから、この點は特に注意するがよい。

「キレイデハアリマセンカ」反語的の表出は初めてであるから、特に注意し、而して種々に適用させて、之が意味と用法とに習熟させるがよい。

「オソクオキル人」俗に言ふ朝寝坊を意味するのである。「人」といふ漢字は象形文字で、人を側面より見た貌をとつたものである。正面から見て象つた文字は大の字である。漢音は「ジン」吳音は「ニン」で、訓は「ヒト」で、人類・人間・大人・性質・人民等の意味がある。運筆の順は「ノ」である。

「コノ」は「アノ」と比較して知らしめる。併し此の場合は太陽が我より遠くか

け離れた所にありながら、それをさし「コノ」と使つてゐるのであるから、其の用法を十分理解せしめなければならぬ。

「デキマセン」は「デキマス」と比較して知らしめる。「日ノデヲミルコトガデキマセン」の裏面に於ては、晏起の人は只に日の出の大觀に接することができないのみでなく、身體の保健にもよろしくないことを附説するがよい。

七、本文章は四節から成り、第一節は曉天が紅を呈現した所。第二節は朝日が次第々々にのぼる有様。第三節は日が全く東山を離れ、燦然たる光を放つて輝く光景。第四節は早起の奨励に付記述したのである。従つて第一・二・三節は自然の大觀を描寫したのであるが、第四節に至つて一種の教訓的記述になつて居る。故に一部分は觀賞的態度で、一部分は實行的態度で、取扱はなければならぬことになる。冷熱兩様の取扱とは随分六ヶ敷境地に立たなければならぬが、私共の考は甲者即ち藝術的態度を主として取扱ひ、其の裏に乙者が自然に悟られるやうに取扱つて行きたいと思ふ。

八、語句の練習及び應用例

1. 語句の比較

「アチラ」と「コチラ」。「日ガデマス」と「日ガデマシタ」。「ミテキルウチニ」と「ミナイウチニ」。「キレイデアリマス」と「キレイデアリマセンカ」。「オソク」と「ハヤク」。「オキル人」と「ネル人」。「ミルコトガデキマス」と「ミルコトガデキマセン」……等

2. 語句の適用

マッ○カ○ナ○カ○ホ ○ア○ノ○コ○ハ○マ○ツ○カ○ナ○キ○モ○ノ○ヲ○キ○テ○キ○マ○ス ○カ○ホ○ガ○マ○ツ○カ○ニ
ナリマシタ イマツキガデマス アアツキガデマシタ モウ日ガクレマ
シタ モウヨガアケマシタ ヨガスツカリアケマシタ キレイナハナデ
ハア○リ○マ○セ○ン○カ ○カ○ラ○ダ○ノ○ヨ○ワ○イ○人 ○ハ○オ○モ○シ○ロ○ク○ア○ソ○ブ○コ○ト○ガ○デ○キ○マ○セ○
ン

九、補習文

アチラ ノ ソラ ガ シロク ナリマシタ。イマ ツキ ガ デマス。
スコシ ミエダシマシタ。アア、ハンブン デマシタ。アア、モウ スツ
カリ デマシタ。ナント キレイ デハ アリマセンカ。クロイ クモ
ガ ナガレテ キマシタ。ツキ ガ ソノ ナカ ニ カクレマシタ。ア

ア、デマシタ。イケ ノ コヒ ガ フドリダシマシタ。
一〇、挿繪は農村の日の出の光景で、朝暉が今驟變たる雲を破り、燦然と光輝を放つて出づる所である。舊教科書よりは雄大に描いてある。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖の觀察

讀本の挿繪を擴大し、之に色彩を施した掛圖を示し、兒童の實際に直觀した實際經驗と結合して、日の出に關する内容を整理する。

二、通讀

整理した内容を心にもつて、各自をして自由に一、二回讀ましめる。

三、語句の教授

通讀したる後、分らぬ所を質問せしめ、また教師よりも質問して、次の語句の内容を明かにする。

「日ノデ」「ソラ」「マツカニ」「イマ」「ミテキルウチニ」「アガツテキマス」「ア

ア「モウ」「スツカリデマシタ」「アリマセンカ」…等

(注意教授の注意部に示した如く、語句の内容の生々した所を彼等の経験と結びつけて味はせるやう注意する。)

四、讀方練習

各節毎に、また纏めて、五六の兒童に讀ましめ、また全體をして齊讀をもさせる。

五、語句の比較及び假名遣

注意部に記載しある各語句を比較して其の意味を一層明かにする。次に記する假名遣につきよく注意させる。

マツカ ミテキルウチニ モウ スツカリ…等。

六、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、語句及び内容の玩味

語句の意味、及び各節に於ける内容を問答し、一層確實に感得せしめる。

八、朗讀

個人的に二三の兒童を指名して朗讀せしめる。而して其の音聲緩急言語の

明否等につき批評する。

九、語句の適用

「アチラ」「マツカ」「イマ」「ミテキルウチニ」「アガツテキマス」「アア」「モウ」「スツカリ」「アリマセンカ」…等の語句を填充法又は適用法によつて適用せしめ、之が用法に習熟せしめる。

第二時

一、復習

前習の所を其の内容形式の兩面に互り復習する。

一回讀ましめる。語句内容の問答。假名遣等の吟味。

二、通讀

本日授くべき所を各自をして自由に讀ましめる。

三、語句の教授

通讀したる後質問により次の語句の意義を明かにする。

「オソクオキル人」「コノ」「ミルコトガデキマセン」「人」の漢字…等。

四、讀方練習。

個人的にまた齊唱的に讀ましめる

五、語句の比較及び假名遣

次の語句等を比較して其の意味を明かにする。

「オソク」と「ハヤク」 「コノ」と「アノ」 「デキマセン」と「デキマス」等の比較。「オソク」
「オキル」等の假名遣

六、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

七、語句内容の復演

語句の復讀。文意を適切に問答して其の内容を深く味はしめる。

八、朗讀

二三の兒童をして朗讀せしめる。

九、語句の適用

「オソク」「キレイナ」「デキマセン」……等の語句を填充法又は之を使つて短文
を書かして、之が用法に習熟せしめる。

第三時

一、全文の復習

1、各節毎に讀ましめ、其の内容につき問答。

2、語法上の問答。

3、全文の朗讀及び全意の玩味。

二、練習應用

1、語句の適用

「アチラ」「コチラ」「コノ」「アノ」「アリマセン」「アリマセンカ」「オソク」「ハ
ヤク」「デキマセン」「デキマス」……等を書取法填充法又は短文記述によつ
て適用に習熟せしめる。

2、誤字の發見

次の文につき其の誤れる所を發見せしめる。

(イ) ソソク フキル 人 ハ、キレイナ 日ノデ オ ミル コト ガ
デキマセン。

(ロ) イマ 日 ガ デマス。ミテ イル ウチ ニ、ダンダン ノボツテ
 キマス。
 (ハ) アサヒ ガ スツカリ デマシタ。ナント キレイ デハ アリマセ
 ン。

三、補習文の讀解

- 1、各自をして讀ましめる。
- 2、文意につき問答。
- 3、朗讀(個讀・齊讀)

(注意) 補習文は取扱上の注意の部にあり、参照ありたし。本文取扱の注意は前記の通りである。

備考

大海の日の出―枕を撼かす濤聲に夢を被られ、起つて戸を開けぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。
 午前四時過ぎにもやあらん。海上なほほの闇く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うて爛りたる棒色の横たふあり。上りては濃き青藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を挂く。光さやかにして、宛ら東瀛を鎮するに似たり。左手に黒くさし出でたるは犬

吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈ありて、陸より海にかけ、連りに白光の環を畫きぬ。
 暫らくする程に、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ來り、夜の衣は東より次第に剥けて、蒼白き曉の波を踏みて、此方へ近寄るさまも指點すべく、磯の黒き濤白くうちかゝるさまも、漸く明かになり來りぬ。眼を上ぐれば黄金の弓と見し月も何時か白銀の弓とかはり、爛りて見えし東の空も、次第に黄色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の腹は黒うして、背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさまよへど、東の空已に暈を開きて、太平洋の夜は今明けんとす。
 已にして曙光は花の發くが如く、圓波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水いよ／＼白く、東の天ます／＼黄ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れゆきて、果はありとも見えすなりぬ。此の時、日の使とも覺しきわたり鳥の一群鳴きつれて、海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波といふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるさゝめき、聲なき聲四方に滿つ。
 五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空見る金光さし來り、忽然として猩紅の一點海端に浮み出でぬ。すは日出でぬと思ふまもなく、息をもつかせず、瞬く間もなく、海神が手もて撃ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一掃して名残なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遅く、萬斛の金たら／＼と昇る日より滴りて、萬里一瞬此方を指して長蛇の如く大洋を走るかと思へば、眼下の磯に忽然として二丈ばかりの黄金を飛ばしぬ(徳富蘆花)。

第三、カトウ キヨマサ

要旨

形式上――「カトウキヨマサ」「トラガリ」「アレマハリマス」「ヤリ」「シヅシヅト」「トビカカ

ツテ「タツタ」「ツキ」「ツキコロシマシタ」等の語句の意味用法。漢字「大」「口」の讀方書方。「カトウ」「マハル」「シヅシヅ」等の假名遣を授け、活動を敘述した文の讀解に習熟せしめる。

内容上——加藤清正の爲人、虎の形態習性につき簡短に知らしめ、虎狩の壯舉に感觸せしめる。

區分

第一時 全文に於ける文字語句の意義及び全文の讀方練習。

第二時 全文の玩味及び練習應用。

第三時 全文の復習及び補習文の讀解。

教具

掛圖(挿繪を擴大したるもの)

教法

(甲)教授上の注意

一、加藤清正は或は繪畫によつて、或は話によつて、兒童はもう早くから知つてゐる一武將である。殊に本課の挿繪は清正が長柄の槍を振つて、大虎を刺して

ゐる所であるから、之を見ただけで兒童はもう教材の内の人である。新加でも感興的の材料である。

二、本課の取扱に對しては先づ挿繪を示し、これによつて内容を整理し、然る後文章を讀ましめると言ふ所謂内容から形式に入らうとする考の人もあるが、私共はそれと反對である。先づ挿繪を示し、

これは誰——(加藤清正) これは何——(大きな虎) 今どうしてゐる所ですか——(清正が槍で刺殺してゐる所)

と言ふやうに極く簡短に問答して、「サア、清正はどんな風にして、この大虎を刺殺したか、讀んで知ることによ

う。といつて、兒童をして早く讀んで知らうとする氣を惹き起し、それから讀ましめて、其の内容を知り、興味を覺えるといふやうに取扱ふのである。即ち形式に即して内容に活かしめるといふ方法を執るのである。

三、併し斯う言つても子供のこと故、さうこちらの註文通りに行くものでない。彼等が此の文を讀んだ所で、紙面に書いてあること位しか玩味し得ないと思

ふ。そこで教師は適當に布行して活寫して行くのである。例へば「大キナトラガデテキテアレマハリマス」と讀んだならば、

「大きな猛き虎が現はれて来て、眼を瞋らし、口を開き、牙をむき出し、ウーとほえながら狂ひ廻はるその様子が目に見える。」

といふやうに活寫して行くのである。即ち形式に即して内容を活寫して行くのである。斯様に取扱ふことが、此の如き敘事的文章に於ては至切の要求と思ふのである。

四、そこで形式に即して内容を活寫し行くとして、どの位の範圍程度で行くかは、學年の程度上考ふべきことである。左にそれを限定して置かう。

「カトウキヨマサガトラガリヨシマシタ」——ここでは、加藤清正は昔の偉い大將で、大層強い方であつたから、人は皆鬼清正々々々と呼んだのである。太閤様の命令で朝鮮征伐に行つたとき、此の國に虎が多く棲まつてゐて、夜分になると、此奴のそ〜と出て来て、日本の兵隊さんを喰つて行くものだから、清正は大層怒つて強い手下を引連れて虎棲む山の中にはいつて、虎狩をしたのである。虎狩といふのは虎の居る山の中に入つてそれを探し出し、槍や鐵砲で

殺すことである。」といふ位に、

「大キナトラガデテキテアレマハリマス」——ここでは、清正が長い槍を小脇にかいこんで、此處にゐないか、彼處にゐないかと、探し居る内、ある岩陰で大きな虎に出遇つたのである。虎は、清正の姿を見るや、眼を瞋らし、口を開き、牙をむき出し、爪をとぎ、凄くほえながら、あちらに行き、こちらに行き、隙があつたら、今にも飛びかかつて、只一口といふ勢で荒れまはつてゐる所である。」と云ふ位に、

「キヨマサハナガイヤリヲモツテ、シヅシヅトススンデイキマス」——ここでは、清正は少しもうるたへず、落付拂つて、長い槍を斯ういふ風にもつて、態度で示す。虎をにらみながら、しづ〜と進んで行く所である。」といふ位に、

「トラガ大キナトラヲアケテ、トビカカツテクルトコロヲ、キヨマサハタツターツキデツキコロシマシタ」——此處では、清正が斯くじり〜と虎をにらみながら進んで行くと、虎も爛々たる眼光で清正をにらみながら、一歩一歩と後へに退いて行く。しかし後には大きな岩があつてもう退くことが出来ぬ、虎は絶體絶命、只一口にと大きな口を開いて、清正に飛びかかつてたのである。鬼でも

取つて拉くといふ清正のことであるから、何で恐れようか。飛びかかつて来る所を體をかはしたつた一つきで、さしとほしたのである。さすがの大虎も、急所をつかれたものであるから、悲しき唸聲を上げて、死んでしまつたのである。なんと勇しい話ではないかといふ位に布衍して行くのである。斯く布衍的に活寫した後、此の内容を心に浮べながら、各自をして二三回讀ましめる。さうすると言々句々悉く活きて來ることになる。

五、文字語句等は、大體次に示す所に基き適切に知らしめる所ありたい。

「カトウキヨマサ」——太閤様の家來で、太閤様のために、生命も身體もすてて働いた偉い方である。此の方の虎狩は名高いものである。同時に假名遣にも注意させる。

「トラガリ」——虎の棲む山に入つて之をさがし殺すことで、昔は弓や槍で殺したが、今は多く鐵砲で殺す。尙兒童の理會に顧みて「カリ」といふことは單に殺すの意味、だけでなく「採る」「見る」などの意味にも使ふことを、螢狩、茸狩、紅葉狩等と結びつけて知らしめる所あつてもよい。

「大キナ」——之は適用によつて、其の意味用法を知らしめるがよい。「大」は指事

文字で、人の身體を正面から見た貌で、首も手も足も皆具備した相の文字である。漢音は「タイ」吳音は「ダイ」訓には「オホイナリ」「フトシ」「オホイニ」等がある。選筆の順は「一ノ」である。新字であるから注意して授けるを要する。

「トラ」——虎は一の巻で既に習つてゐるから、茲では一步進めて、掛圖又は標本により全身は黄色で、黒色の斑紋あること。口は濶く大きくして、内に鋭き牙を有すること。眼は爛々として人を射るの凄味あること。趾頭の爪は鉤状をなして鋭いこと。草原若くは山間に住み、牛、鹿、猪等を捕へて食し、時としては人里にでて人畜を襲ふことある等、犷猛な點を中心として平易に説くがよい。併し之がため恰かも理科教授のやうになり、知的取扱に傾いて、折角の感興を殺ぐやうなことがあつてはならぬ。此の點は特に注意を喚んで置く。

「アレマハリマス」——目を瞑らし、口を開き牙を鳴らし、凄く唸つて、荒れ狂ふ様子を十分活寫する。「アレマハリマシタ」と比較して、動作が現在の點に注意せしめる。「マハリマス」の假名遣も同様である。

「ヤリ」——は別に其の形狀用途等について説くことは要せぬ。若し標本でもあつたら之を示し、直覺的にこんなものであるといふことを意識させたらよ

い。

「シヅシヅト」——「ススンデキマス」を限定して居る詞である。十分氣を配つて一歩一歩靜に近づいてゆく有様を意味するのである。適用と相俟つて一層其の意味及び用法を明かにしたらよい。「ヤリヲモツテススンデキマス」と「ヤリヲモツテシヅシヅトススンデキマス」とを比較して副詞的職能を理會せしめるも一方法である。

「ススンデキマス」——此の語によつて清正が、毫も犇猛なる虎に恐れる所なく、靜々と進んでゆく其の大膽不敵の有様をよく想はしめるがよい。

「トビカカツテ」——「カカル」には(1)垂下するの意、(2)かかるの意、(3)仕向けられるの意、(4)厄介になるの意、(5)心にとどまるの意、(6)攻めるの意、(7)かかるとびかかる等の意味があるが、此處は勿論「攻める」の意である。適用等と相俟つて其の意味用法を明かにしたらよい。

「トビカカツテクルトコロヲ」——まだ清正の身に此の猛獸の爪牙が觸れないのである。此の點をよく注意させる。

「タツターツキ」——「タツタ」は副詞で「ダダ」の音便である。「タツターツキ」は二度の意味でなく、ただ一度の意味である。應用と相俟つて其の意味用法を明かにするがよい。

「ツキコロシタ」——槍でつき殺したので「ウチコロシタ」「イコロシタ」等と比較して其の意味を意識させるがよい。

「口」——象形文字で、口の形に象つたのである。漢音は「コウ」で、吳音は「ク」で、訓は「クチ」である。運筆順は「一フー」である。新字であるから注意して授ける。

六、練習應用例

1. 適用すべき語句。

「アレマハル」「シヅシヅト」「トビカカツテ」「タツターツキ」……等。

2. 文形上の適用。

(イ)……シヅシヅト……。(ロ)……トコロヲ……。

七、補習文

○イヌ

アル ヒト ガ イヌ ヲ ツレテ、 ヤマ ニ カリ ニ イキマシタ。

各説 第三 カトウキヨマサ

ヒ ガ クレマシタ カラ、イハノ カゲ ニ ヤドリマシタ。ヨナカ
 コロ ニ ナル ト、イヌ ガ ニハカ ニ ホエテ、ソノ 人 ニ トビ
 カカリマス。ソノ 人 ガ トウトウ オコツテ、カタナ デ クビ フ
 キリオトシマシタ。スルト ソノ クビ ガ ドコカ ヘ トンデ イキマ
 シタ。シバラク スルト、ウヘ カラ チ ノ シヅク ガ オチテキマス。
 ヨク ミルト、サキ ニ キツタ イヌ ノ クビ ガ ダイジャ ノ ノ
 ンド ニ クヒツイテ キマシタ。

乙教授の實際

第一時

一、掛圖の觀察

掛圖を觀察せしめて、

これは誰——加藤清正。これは何——大きな虎。今どうしてゐるのですか——清正が長い槍をもつて、つき殺してゐる。ここはどこだらうか——山の中。

二、通讀

各自をして自由に一度讀ましめる。

三、文字語句の教授

一節一節に讀ましめ、そこに讀めぬ文字、分らぬ語句なきかを問ひ、兒童の質問に應ずる。各節に於て授くべき文字語句は大要次の如くである。

- 第一節——「カトウキヨマサ」「トラガリ」
- 第二節——「大キナトラ」「アレマハリマス」「大」
- 第三節——「ナガイヤリ」「シヅシヅト」「ススンデ」
- 第四節——「口」「トビカカツテ」「タツタ」「一ツキ」「ツキコロシマシタ」

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

五、全文の内容吟味

次の如く取扱つて全文の内容を玩味させる。

- 1、清正は何をしましたか。その虎狩したことはどこに書いてありますか。
 - 2、大きな虎がどうしましたか。その荒廻はることはどこに書いてありますか。
 - 3、そこで清正はどうしましたか。長い槍をもつて、静々と進んだことについてはどうかいてありますか。
 - 4、虎が之を見てどうしましたか。それを清正がどうしましたか。そのこととはどこにどう書いてありますか。
- 斯く問答した後教師は更に其の内容を布行的に話して、彼等の感興を喚び起す。

第二時

一、復習

二三の兒童を指名して全文を讀ましめ、次に主要語句について問答す。

二、語句内容の玩味

先づ主要語句につき其の内容を一層深く玩味せしめる。次に各節につき其

の内容を布行的に玩味せしめる。

(注意)内容の範圍程度及び活寫の方法は取扱上の注意の部を是非参照ありたい。

三、朗讀

個讀・齊讀。(讀振・明否・緩急等につき批正すべきは前述の如し)

四、練習・應用

- 1、次の語句につき其の誤を發見せしめ、假名遣の練習をなす。
「カトキヨマサ」「アレマワリマス」「シズシズト」「ススンデキキマス」「口ヲアキテ」…等。
- 2、次の漢字を可成多く且正しく書かしめる。
「日」「人」「犬」「口」或は「ヒ」「ノ」「デ」「ヒト」「ガ」「オ」「キ」「ル」「オ」「ホ」「キ」「ナ」「ク」「チ」と板書して傍線を施したものを漢字に直させるもよい。

五、朗讀

各自をして自由に時間のある限り幾遍でも讀ましめる。

第三時

一、復習

(1) 一・二回讀ましめる。(2) 語句假名遣等につき問答。(3) 漢字の書方の吟味。

二、内容の玩味

各節につき次の如く問答して内容を一層深く味はしめる。

第一節——「カトウキヨマサ」と讀んだとき、清正についてどんなことが心に浮びますか。「トラガリ」と讀んだときは。

第二節——「大キナトラガデキテ」と讀んだとき心にどう思ひますか。「アレマハル」「シヅツシト」「トビカカツテ」「タツタ……」等の語句を、填充法或

といふ風に第三・四節も同様に問答して、兒童の感想を語らしめ、且其の都度教師の感想をも加へて、内容を活寫する。

三、語句等の應用

「アレマハル」「シヅツシト」「トビカカツテ」「タツタ……」等の語句を、填充法或は之を用ひて可然他の場合を口述又は筆述によつて、之が用法に習熟せしめる。

る。

四、補習文の讀解

(1) 一讀せしめ、次に(2)語句について問答、次に(3)内容を玩味させる。

(注意)之は深く立ち入つて取扱ふのでない。兒童が既得の國語力によつて、自身で讀んで、自身で感得するに任せてよいのである。

備考

加藤清正の人格、虎の形態、習性等については、誰も知悉のとであるから、左に補習文作爲の資料として、膳臣巴提使の虎退治につき、兒童を對象とした一文を掲げて置く。若し清正の虎狩を知らうと思つたら、常山紀談について見たらよい。

昔日本の國に膳臣巴提使といふ強い大將がゐました。或時天子様の御使で、朝鮮の國へ行くことになりました。ところがその時入つになる男の子も、さすが大將の子だけあつて、

「お父さん。私も一所に連れて行つて頂戴」と、しきりにたのみました。一里か二里位ある所ならば、兎も角、海山何百里といふ隔のある所、殊に天子様の御用で行くのであるから、子供をつれていつては不便であるから、

「お父さんは直ぐに歸つて来るから、大人しくして待つてゐなさい。それに朝鮮といふ國は、虎がたくさんゐるから、それに喰べられると大變です。から」と、いろ／＼論じたが、どうしても聞きいれない。仕方ないから、とう／＼連れて朝鮮に渡りま

した。

朝鮮について「ら宿屋に泊つておましたが、或日のこと、雪がチラ／＼と降つて来ました。子供には面白いものであるから、巴提使の兒も外へで遊んでおりました。もとより知らぬ土地であるから、道に迷ふたのか、それとも何物かに捕はれたのか、日が暮れてもまだ歸つて来ません。父巴提使は深く心配して、表に出て見ると、雪の上に大きな虎の足跡がついてゐる。「さあ、これや大變。虎に喰はれたに相違ない。己れ憎くい虎奴。」と、直に用意をして、虎の足跡をつけて行くと、山の谷間に大きな洞穴がある。其のあたりの雪が血に染つてゐる。十分用心して内をのぞいて見ると、案の如く大虎が一匹、爛々たる眼を光らして居る。巴提使の姿を見るや、躍り出て、飛びかかつて来た。巴提使は、「己れ我が子の敵思ひ知れ！」と叫んで見事にぶち切つた。そして其の皮を剥いて宿屋に戻つた。用事がすんでから國に歸り、其の皮を天子様に献上しました。天子様がたいそう其の勇氣をお賞めになりました。

第四 トラ ト キツネ

要旨

形式上——「キツネ」「クフゾ」「ヘイキナカホ」「オレ」「バチガアタルゾ」「コハガツテ」「イツシヨニコイ」「トチユウ」「キガツカズ」「ナルホド」「エライナ」等の語句の意味用法。

「クフ」「カホ」「コハガツテ」「オモフ」「イヒマシタ」「トチユウ」等の假名遣を授け、敘事的文章の讀解に習熟せしめる。
 内容上——虎と狐との形態習性につき簡短に知らしめ、二者から成る寓話を通して智慧なきものは假令強大な體力を有して居つても、智慧あるものを利用してられるといふ一の教訓に觸れしめる。

区分

- 第一時 第一・二節 自六頁終六頁 形式及び内容の教授。
- 第二時 第三・四節 自九頁初五頁 形式及び内容の教授。
- 第三時 全文の復習。
- 第四時 練習應用及び補習文の讀解。

教具

掛圖(挿繪を擴大したるもの)

教法

(甲)教授上の注意

一、本教材は一種の寓話で、今昔物語やイソップ物語に其の原據がある。挿繪を

見ると大きな虎が小さな狐の後に歩いて行く。之を見た馬も、牛も、兎も、猪も、猿も、鹿も、命こそ大事と、先を争うて逃行く有様はいかにも狡猾で、兒童をして思はず快を叫ばしめる材料である。前課にあつては百獸の王にも擬すべき虎が人間によつて命までも取られ、此の課に於ては小さな狐の狡猾によつて、餓ゑた腹を肥すことも出来ず、さんぐに弄ばれる所は、氣味よくもあれば、また可哀相にもある。面白き對照の下に配當された新加の材料である。

二、本寓話の要求は勿論此の内に流れて居る教訓に觸れしめるのである。併し其の教訓たるや、虎を主とする場合と、狐を主とする場合と、多少其の精神を異にする。私共の考は虎を主とし、

「智慧のないものは假令至強の體力を身に具へて居つても、智慧のあるものを利用せられるものである」

と言ふ教訓に觸れさせたいと思ふ。従つて本課の精神も茲に置いて取扱ふ考である。

三、寓話の目的は屢言つた如く、其の内に流動する一種の教訓に觸れしめるが主であるから、此の内に現はれて來るいろ／＼の役者即ち諸動物等については、

一々其の形態習性等について知らしめる必要がない。従つて本寓話に於ても其の主人公たる虎と狐とは兎も角も、其他馬・牛・兎・鹿等の諸役者については一々それが形態習性等につき説く必要はない。只いづれも命こそ大事だといつて、先を争うて逃げて行く其の狼狽の有様に觸目させたらよい。即ち虎と狐とについては

虎に於ては——形態上から生ずる威風。草原や深林の中に棲んで、水牛・鹿・野猪・狐等を捕へて食するといふ習性の一部。

狐に於ては——形態の総合的知覺。性疑ひ深く、狡猾に富むといふ習性の一部。

を知らしめたらよい。要するに本教材の内容については、虎は犷猛な野獸で百獸之に潛伏して居るといふ點と、狐は犬に似た小さな野獸であるが、性頗る狡猾に長けてゐるといふ點を知らしめ、それに本寓話の内に流動して居る前記の教訓に接觸させるといふ態度で取扱つたらよいのである。

四、本課の取扱も矢張前課の如く、形式に即して内容に活かしめるといふ方法が適當である。併し前課は只事實の直寫なるに對し、本課は假想の上に立つ間

接的の敘述であるから、其の間に自ら多少の相違あることを意識しなければならぬ。即ち前課は讀んで面白く感ずればよいのに對し、之は面白く感じた上に一種の教訓に活かしめなければならぬのである。左にこの方針に基く取扱の要點を記して行かう。

「トラガキツネニアツテ」此處では或日一匹の大きな虎が何か食物が無からうかと、彼方此方を探しまはつたが、其の日に限り何も見つからない。腹がもう空になつて、餓しくてたまらぬ。折柄丁度森の中で一匹の狐に出遇つたのである」と知らせる。

「ハラガハツタカラオマヘヨクフゾ」此處では虎の形だけ見てさへ懼れる狐が、此の悲しい宣告を聞いたとき、どんなに魂消えたことであらう」と知らせる。「キツネハヘイキナカホデ」此處ではこの大膽を装ふ所が所謂狐の狡智に富んだ所である」と知らせる。

「オレヨクフト、バチガアタルゾ」此處では虎の威力を壓へるときには、何かそれ以上の威力を以てしなければならぬ。「バチガアタル」といつて、神の權威を以てしたことは頗る振つてゐる。流石の虎もこれにはぎよつとしたことで

あらう。「オレ」といつて上の者が下に對して使ふ詞を使つて、勿躰振る所も中利いて居る。」と知らせる。

「オレハタダモノノカシラデ、ミンナガオレヨコハガツテキル」此處では巧に虎の威を藉つて威嚇す所は彼の狡智が一步步々深刻に働き行く所であると知らせる。

「ウソトオモフナラ、イツシヨニコイ」自分の言を事實の上に證據立てようとする彼の悪智惠である。老獺も茲に至つては寧ろ驚歎に價する。「イツシヨニコイ」と命令的に言ひ放つ所、最早虎を呑みこんだ言葉で、中々力がある。要するに狐の言は初めは神威の裏に隠れて虎を威嚇し、次に對者の威力を利用して威嚇し、而して單に口頭上のみでなく、事實に訴へて、己が言を信せしめようとする所は中々に抜目のない論法である。」と知らせる。

「トラガツイテイツテミルト」此處では剛愎な虎もいよ／＼狐の言に服従し、のそ／＼と其の後について行く姿は頗る滑稽ではないかと知らせる。

「トチユウデアツタケダモノハミンナニゲテイキマス」此處では百獸のにげるは尤である。併しそれは狐を懼れて逃るのではなく、悍猛な虎を懼れて逃る

のである。然るにそれと悟らぬ虎こそ誠に愚者の大將ではないか。之に反し狐が豫期の計畫がちやんど圖に當つた所、其の得意想ふべきではあるまいか」と知らせる。

「ナルホドキツネハエライナ」——此處では、自分に具はる偉大な威力を自分で見るとの明なく、小弱な狐の狡智に翻弄せられて、此の奇怪の言を吐く。天下に愚物も多いが、これは慥かにそれ等の隊長であらう。「智恵のないものは假令至強の體力を有してゐても、智恵のあるものに往々翻弄せられる」といふ教訓は全くそれを言ふのであらう」と知らせる。

「キツネヨクフコトヲヤマメマシタ」——此處では、虎は智恵のない所から、自分の空腹を癒すことができなかつたが、狐は之に反し所謂三寸の舌を振つて生命の危急を脱離して、勝者の位置に立つた最後の幕である」と知らせる。

以上の如く教師の巧みなる口調によつて、平易に形式に即して活寫し行けば、此の文章の眞味に兒童をして活かしめることが出来る。

五、尙各語句の教授について注意すべき點を示さば次の如くである。

「トラ」——内容を復演的に知らしめる。併し此の場合は習性を主として説く。

「キツネ」——之も習性を主として知らしめる。

「ヘツタカラ」——カラは文語の「ユエニ」に相當する。「ハラガヘツタ。ハレダカラ。オマヘヲクフ」といふ意味である。適用によつて其の職能を知らしめるがよい。

「オマヘ」——茲では目下のものに對して使ふ言葉として授ける。

「クフゾ」——ゾは用言又は指定時間の助動詞の終止段について、上の事柄を力を入れてさし押へる意を表示する助詞である。適用によつて職能を理會せしめるがよい。「クフ」の假名遣は特に注意を與へる。

「ヘイキナカホ」——ヘイキは臆せぬの意。毫も臆せぬことを「平氣の平三」といふ。併し此處の平氣は眞の平氣でなく、狐は内心非常に恐れてゐるが、外面はわざと恐れぬ顔をよそほふて居る平氣である。その表裏の使ひ分けをして居る點をよく知らしめるがよい。

「オレ」——乃公に同じく、自尊していふ自稱代名詞である。

「クフト」——この「ト」は用言の終止段について假定を表示する助詞である。即ち「若しも乃公を喰ふと罰が當るぞ」といふ意味である。適用によつて其の意

味と用法とを一層確實に知らしめるがよい。

「バチガアタル」―「バチ」は「バツ」の轉呼で、(一)神佛が人の惡を懲すこと(罰が當る)(二)惡事のむくい等の意味がある。茲は狐は神威を藉りて虎を威嚇するつもりで使つたことを知らしめる。

「ケダモノノカシラ」―「ケダモノ」は挿繪にあらはれて居る外に日常彼等の目撃して居る犬・猫・鼯等も其の仲間であることを知らしめ、これが概念の内容を一層廣くして置く方がよい。「カシラ」は長又は王の意味であるが、茲に使つてある「カシラ」は狐が實際百獸の王でもなく、長でもなく、只虎の威を奪つて言つた言葉であることをよく承知させて置く。

「コハガツテキル」―地方によつてはわからぬ兒童もあらうから、「オソレル」等之と同意味の言葉と交渉して知らしめることにするがよい。假名の遣ひ方にも注意。

「ウソトオモフナラ」―「ナラ」は「ナラバ」の略で假定の意を表はす。狐は自己の言の眞實を事實によつて證明せんとし、茲に假定を立てたのである。併し之も眞個に自分にそんな權威があるのでなく、虎の威を藉つてかく言つたを意

識せしめなければならぬ。

「イツシヨニコイ」―「コイ」は命令形である。此の一言の中には中々威力がこもつて居る。即ち狐は虎に對してもう絶対權を握つた立場である。此の點はよく知らせる。

「トチユウ」―先方にまだ到着せぬ路の間をいふ。假名遣に注意する。

「コハガルノダトハ」―「ダ」は地方によつては普通使はぬ所から、耳新しい言葉として迎へるかも知れない。こんな地方では「コハガルノデア、ルトハ」と譯して知らしめる方法をとるがよい。

「キガツカズ」―茲では虎の無智を笑つてやつてもよい。

「ナルホド」―子供に一寸分りにくい。「マコトニ」モットモ等の意味もあるが、茲では「狐の言つた通り、百獸は皆狐を見て逃るわい」と許諾した意味に授けるのがよい。即ち初めの間は狐の言に對し半信半疑であつたが、事實を目撃すると、狐の言の如く相違ないと許可する意味にして取扱ふのである。こんな言葉は種々の場合に適用して、其の意味と用法を知らしめるがよい。

「エライナ」―此の言葉は正面は虎が狐の有する偉大な勢力に敬服して言つた

言葉であるが、其の實狐にあるのでなく、斯く言ふ虎それ自身にあるのである。此の點をよく知らしめなければならぬ。また適用によつて意味と用法を明かにすることも忘れてはならぬ。「ナ」は驚歎に用ひる感動詞である。

「ヤメマシタ」此の言葉の裏面には體力は遂に智力に負けたといふ意味の存在して居ることも知らしめるがよい。

六、本文章は對話式になつて居ることを忘れてはならぬ。而して此の種の文章は兒童をして幾遍でも讀ましめ、其の讀む毎に批判考案させるがよい。文章の眞の内味には斯うする間に觸れることが出来るのである。

七、練習應用例

(一) 語句の適用。

- (1)「ヘッタ」オナカガスツカリヘッタ。(2)「クフゾ」キカナイトソコヘイクゾ。
- (3)「エイキナカホ」ブンキチハシカラレテモ、エイキナカホヲシテキル。(4)
- 「バチガアタル」カミサマヲソマツニスルト、バチガアタル。(5)「カシラ」タ
- ヒハサカナノナカマノカシラデアル。(6)「コハガツテ」ウチノチヨコサン
- ハ、イヌヲタイヘンコハガツテキル。(7)「イツシヨニコイ」センセイノトコ

- (8)「トチュウ」イヘニカヘルト、チュウアソンデハナ
- ラヌ。(9)「ナルホド」ナルホド、大キナヘビデアル。(10)「エライナ」トモキチ
- ハエライナ。チヨコサンハカシヨイナ……等。

(二) 文形の適用。

- (1)……カラ……。(ハラガヘツタカラ、オマヘヲクフゾ)
- (2)……ト……。(オレヲクフト、バチガアタルゾ)
- (3)……ナラ……。(ウソトオモフナラ、イツシヨニコイ)
- (4)……ノダトハ……。(ジブンヲコハガルノダトハ、キガツカズ)

八、補習文

○トラ ト キツネ

トラ ガ キツネ ニ ムカツテ、

「オレ ノ キテ キル キモノ ハ シマ ガ アツテ キミ ノ キ

モノ トハ クラベモノ ニ ナラナイ ホド リツバ デ アル。」

ト イヒマシタ。キツネ ハ

「ナルホド アナタ ノ キモノ ハ リツバ ニハ チガヒナイ。ダガ

ワタクシ ノ ハラ ニ タクハヘテ キル チエ ハ、ウハツラダケ
ノ リツバ ヨリ モ モツト、リツバ デ アリマス。
ト コタヘマシタ。

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖の觀察

掛圖を觀察せしめて、

これは何—虎。これは何—狐。これは、これは—馬・牛・兎・狐・野・猪・猿・鹿。こ

こは今どうした所であらうか—虎が來たから馬などが懼れて逃げ行く所。
等簡單に問答して、讀んで見ようとする動機を喚起する。

二、通讀

各自をして自由に一二回讀ましめる。

三、語句の意義の教授

第一節を讀ましめ、問答によつて、

「トラ」「キツネ」「ハラガヘツタ」「オマヘ」「クフゾ」……等

の語句の意義を明かにする。次に

第二節を讀ましめ、問答によつて、

「ヘイキナカホ」「オレ」「バチガアタルゾ」「ケダモノノカシラ」「コハガツテ」

「イツシヨニコイ」「ウソ」……等

の語句の意義を明かにする。

(注意)語句の内容については教授上の注意の部参照。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

五、内容の玩味

教師が布衍的に批判的に形式に即して内容を活寫し、感興を動かすと同時に
この内に流れて居る教訓に觸れさせて行く。

(注意)教授上の注意の部四の項参照。

六、讀方練習

先づ内容を味ひながら各自をして自由に一二回讀ましめ、次に四五の兒童を

指名して讀ましめる。

七、語法上の注意

次の語句につき語法及び假名遣等につき注意する。

(1) 語法上

「ハラガヘツクカラ。オマヘヲクフゾ。」
「オレヲクフト。バチガアタルゾ。」
「ウツトオモフナラ。イツシヨニコイ」……等。

(2) 假名遣

「クフゾ」「イヒマシタ」「ヘイキナカホ」
「コハガツテ」「オモフナラ」「イツシヨニ」……等。

八、朗讀

時間のある限り、個人的に或は一齊的に讀ましめる。

第二時

一、復習

前に習つた所を復習する。

(1) 一回讀ましめる。(2) 主要語句につき問答する。

二、通讀

第三、四節を各自に讀ましめる。

三、語句の意義につき問答

第三節を讀ましめ、問答によつて、次の語句の意義を明かにする。

「ツイテイツテ」「トチユウ」「ケダモノ」……等。

第四節を讀ましめ、問答によつて、次の語句の意義を明かにする。

「コハガル」「キガツカズ」「ナルホド」「エライナ」……等。

四、讀方練習

個人的に一齊的に讀ましめる。

五、内容の玩味

教師が布行的に批判的に形式に即して内容を活寫し、感興を喚び起すと同時に此の内に流動する教訓に觸れしめて行く。

(注意) 教授上の注意の部四の項参照。

六、讀方練習

先づ内容を味ひながら、各自をして、自由に一二回讀ましめる。次に二三の兒童を指名して讀ましめる。

七、語法上の注意

(1) 語法上。

「イツテミルト、トチュウデ」「ニゲテイキマス」「ニゲテイキマシタ」「コハガ
ルノダトハキガツカズ」「エライナ」…等。

(2) 假名遣

「トチュウ」「コハガル」「オモツテ」…等。

八、朗讀

時間の許す限り、個人的に或は一齊的に讀ましめる。

第三時

一、復習

(1) 一二回讀ましめる。(2) 語句の意義につき問答。(3) 語句の比較等。

二、内容の玩味

(1) 各節につき問答して一層深く其の内容を玩味させる。(2) 全文の上から問答して其の中に流れて居る教訓に觸れしめる。

三、朗讀

二三の兒童を指名して讀ましめる。

四、練習・應用

(1) 語句の適用。(書取法、填充法、短文作爲等)

ヘツタ クフゾ ヘイキナカホ バチガアタル コハガツテ
イツシヨニコイ トチュウ ナルホド…等。

(2) 書取

次の語句を教師は口唱して書取らしめ、傍ら假名遣の誤りを批正する。

(イ) カキヲタクサンク。フト、オナカガイタクナリマス。(ロ) ネズミハタイソウ
ネコヲコハガツテキマス。(ハ) ヒノデヲミヨウトオモフナラ。ハヤクオキナ
サイ。(ニ) イヘニカヘルトチュウデアソソデキテハナリマセン。(ホ) センセ
イノラシヘヲマモルコハ、イマニエライ人ニナリマス…等。

五、話方の練習

挿繪によつて、彼等の觀察する所を自由に話さしめる。

第四時

一、全文の復習

(1) 各自をして自由に一讀せしむ。(2) 主要語句につき問答する。(3) 内容につき問答する。(4) 本文に對する教師の感想を語る。

二、練習應用

主として文形の適用を課す。(教授上の注意部參照)

(注意) 文形の適用中兒童の創作に俟つことの無理と考へるものは、教師の創作したるものを或は塗板に書いて之を讀ましめ、或は口唱で書取らして後之を讀ましめ、讀本にある原文形と比較對照して、其の文形の適用に注意せしめるもよい。

三、補習文の讀解

兒童が既に有する國語力を利用して、本課教授の注意部にある補習文を讀ましめ、讀書力の増進を圖る。

備考

(注意) 補習文は別に時間をとつて授けてもよい。本案はそれに対する餘裕は存してあるのである。

補習文の資料としたイッツプ物語にある「狐と豹」の一文を掲げて參考に供しよう。

狐と豹—狐と豹とがお互に器量自慢をして「われの方が美しい」「いやおれの方が立派だ」と言つて争つた。豹が言ふやうには

「これ見ろ、おれの上着のつや〜といかにも立派なことを。君の上衣とは較べ物にならぬではないか。」

すると狐は負けてはぬない。

「なるほどお前さんの上着が美しいにはちがひない。だが私の腹に蓄へた智惠は上つ面だけの綺麗とは比べものにならぬ」といつた。

訓言—貌の美よりも心の賢。

第五月

要旨

形式上—「月」の新字。「マンマルイ」「マツクロイ」「ボンノヤウナ」「スミノヤウナ」等の語

句の意味用法。「ヤウ」の假名遣。月夜の光景を歌つた韻文の讀解に習熟せしめる。

内容上——月雲の觀念。及び月夜の美を感せしめて自然に對する趣味を養ふ。

區分

- 第一時 第一節 自十一頁六行 形式及び内容を授く。
- 第二時 第二節 自十二頁五行 形式及び内容を授く。
- 第三時 第三節 自十三頁三行 形式及び内容を授く。
- 第四時 全復習及び補習文の讀解。

教具

掛圖(彩色したるもの)

教法

(甲)教授上の注意

一、本課は團々たる月が今東山を離れて皎々と輝いてゐる。そこへ眞黒な雲が流れて来て、其の清姿を隠した。併し間もなくそれが去つて再び皎々と輝いてゐるといふ月夜の美觀を歌にした所謂敘景詩である。毫も悲哀の調を帶

びず、無邪氣な裏に愉快な氣分の満ちてゐる所は兒童の性情によく適合した韻文である。

二、大人が月に對する感じと、子供が月に對する感じとは餘程相違がある。兎角大人は月に對し殆んど因襲的に哀愁の情を表はすのが常である。月を見て故郷を慕ひ、月を見て故人を悲しみ、月を見て友を想ひ、月を見て昔の戀人を恨むなど、皆然りである。勿論之も感情生活の一面の表現だからわらうといふ言はないが、兒童の生活はまだそんな深みにはいつてゐないから、悲哀的の感想を以て、此の韻文に對しては全然失敗して仕舞ふ。本韻文は子供が眞に感じ、眞に叫び、眞に喜ぶといふ單純な思想から出來てゐるのであるから、其處をよく酌みとつて、此の單純な境地に生きて取扱はなければならぬ。教師と兒童との間に感情の反離、趣味の間隔があつたりしては、本教授は不成功に終つて仕舞ふ。此の點はよく注意しなければならぬ。

三、本課は内容から形式に入り、更に内容に還るといふ方法を取るのが一番適當だらうと思ふ。故に次のやうな談話を試み、然る後本文の讀解玩味に入るがよい。

或秋の晩に太郎とお千代がお父さんと共にお庭に出て遊んでゐた。すると、東の空がだんだんに明るくなつて來たので、太郎は、「お父さんもう月が出ますよ」

といつて見てゐる内に、美しい月がちよつと顔を出した。お千代と共に「ああ、出た〜」。弓のやうだね。櫛のやうだね。もう半分出ましたね。」とさわいでゐる内に、月はもう山の端を離れて、眞圓い顔をして、人の住む世界を覗いてゐるのである。太郎とお千代は、

「圓いね、圓いね、まるでお盆のやうだね。」

といつて賞めてゐると、そこへ一團の黒い黒い眞黒な雲が流れて來て、月をかくしたのである。

「おや暗くなつたね。しかしもう出るよ。」

とベンチに腰をかけて待つてゐると、黒雲がだんだん流れて行つて、月はまた元の通りに清き姿を現はしたのである。お父さんは其の間お縁に腰掛けて何かしきりに考へてゐたがやがて、

「太郎よ、お父さんはね、おもしろい歌を作つたからね、それを聞かして上げよう。」

といはれた。太郎もお千代も大そう喜んで駈けて來て、

「どんな歌ですか、歌つて頂戴。教へて頂戴。」

といつて、お習ひした歌がこれから讀む歌である。

といふ風に話して、それから讀本の文を讀ますことにするがよい。この種の記事にはどうしてもこの背景的の談話が必要である。

四、月雲の内容については兒童の經驗に基き、大體次の範圍程度で整理したらよい。

月——夜空に現はれること。月はD O等種々の形に變ずること。月夜の光景は日出・日没の光景と相並んで美しい眺めの一なること、即ち月が出た時の美觀等。

雲——成因については説く必要がない。自然の現象の一として直覺的に其の雲たるを知らしめる。雲は空に浮動すること。一定の形なけれども、色は種々に變化すること等。

五、美觀の養成については、どうしても其の實際の光景に觸れしめなければなら

ぬ。つまり美觀といふことは、言葉の上や、文字の上では與へ難い。必ず其の實光景に觸れしめなければならぬ。此の實經驗なき兒童に對しては、どんなに言葉の上で巧みに説明しても駄目である。事實現象の對象なくして人の感情が生起發動するものでない。故に本課を取扱ふには數日前兒童と約し是非月の現はれる所を見ることにして置く。勿論天文の關係上此の教材を前後して授けることは毫も差支ない。そして授ける當日には該韻文の内容を現はした綺麗な彩色畫をも提示し、一は兒童の過去の經驗を想起する援助に供し、一は月夜の美觀妙趣を表現した自然の縮小として用ひる。斯うすれば既に消え去つた過去の經驗も新しく活きて來るし、月夜に對する美觀妙趣にも強く感ずることになる。つまり本教授にあつては(1)前以て月の上る所を見ることの約束(2)彩色した綺麗な繪畫の提示といふ此の二條件を忘れぬやうにする。

六、文字・語句については次に示す所に基き適切に取扱ふがよい。

「デタデタ月ガ」……「ボンノヤウナ月」——夕陽没して間もなく銀盆の如き月が東天にさし上り清光を下界に投げた時の美觀を歌つたのである。

「デタデタ月ガ」——これは倒置法によつて書いたのである。平敘文に直せば「月ガデタデタ」となる。倒置法は感情の高まつた時の敘述法として自然で且力がある。「デタデタ」は反復法をとつたのである。語句の排列上にも妙味のあることを心に置いて取扱ふがよい。

「月」は新字である。月をかたどつた象形文字である。玉兔・嫦娥等の異名もある。漢音は「ゲツ」吳音は「グワチ」習慣的に「グワツ」と言つて居る。訓は「ツキ」である。運筆の順序は「一」「二」である。

「マルイマルイマンマルイ」——眞に圓い十五夜の月の形を言つたので、之も反復法によつて書き表はしたのである。「マンマルイ」は「眞圓イ」の音便である。即ち眞に圓くして、少しも缺如する所なきを意味する。「マルイ、マルイ、マンマルイ」と形容詞の用法にも注意させるがよい。

「ボンノヤウナ月ガ」——事物其の物を眞に目の前に見る様に、人の感じを起させるに效能ある直喩法を用ひて書いたのである。盆と月とは一は明で一は暗である。故に盆といふと明皎々たる月の美を打消すが如き感じも伴ひ起れども、これは光に用ひたのでなく、形について言つたのである。即ち「ボンノヤウ」

「ウナ月」とは色即ち光に對する比喩でなく、形に對する比喩である。此の點を誤解してはならぬ。「ヤウナ」の「ナ」は文語の指定動詞の「ナル」に相當する助詞である。適用にもよつて其の意味と用法とを明かにするがよい。

「カクレタクモニ」 スミノヤウナクモニ——一團の黒い雲が流れて來て、清き月の姿をおほふた所を歌つたのである。

「カクレタクモニ」——之も倒置法によつて書き表はしたのである。過去の經驗であるが、兒童の中には、

「先生、月がかくれたのでなく、雲が月をかくしたのです。お父さんもさういひなさいました。」

といふものがあつた。成程「カクレタクモニ」といへば、雲が不動で月が動くことにも見られる。嚴密に云へば月も動で、雲も動である。併し見えるが儘に言へば

1、雲來つて月をかくすやうに見えることもあるし（雲動月不動）

2、月走つて雲に入るがやうに見えることもある（月動雲不動）

これは月夜の天空を眺めた時の誰にでもある經驗である。故に本韻文は嚴

密な道理を離れ直覺其の儘に(2)の場合を詩にしたといふことにして取扱つたらよい。勿論「カクレタクモニ」といつた所で「月ガクモニカクレタ」といふのであるから、

「清く輝いてゐた月が、一團の黒い雲が流れて來たから、其の裏にわが姿を隠した。」

といふ風に云へば雲は不動にならない。月もまた不動にならない。そして毫も知的でなく、従つて詩の美をも害することがない。兒童の科學的眼光は愛すべく寧ろ啓培せねばならぬが、文學的材料は科學的眼光で取扱ふと、其中に宿在する妙味を薄くして仕舞ふから、餘り銳利な科學的眼光で、神祕なる消息を見破らぬやうに注意しなければならぬ。

「クロイクロイマツクロイ」——無論句調の上からもあれども黒きが上に黒きを示さうとして此の疊語を用ひたのである。明皎々たる鮮かな月と、黒々たる一團の雲とは、其の對照が全く反對であるから、月の清き鮮けき姿が一層深く心に浮ぶ。「マツクロイ」は「マククロイ」の音便、「マ」は接頭語である。「スミノヤウナ」は雲の黒きを形容した詞で、修辭上から言へば所謂直喩法である。

「マタデタ月ガ……ボンノヤウナ月ガ」まもなく月が黒雲を離れて再び清き姿を現はした所で、前の失望も消え、月是一段の明を増し、一入嬉しき情を言外に込めて歌つたのである。「マタ」は二度の意味で「デタ」の意味を限定して居る。

七、文の成分は次の如くになつて居る。

デタ^主デタ^主月ガ^主。
 マルイ^主マルイ^主マンマルイ^主、ボン^主ノヤウナ^主月ガ^主デタ^主。
 (ツキガ)カクレタ^主、クモニ^主。
 (ツキガ)クロイ^主クロイ^主マツクロイ^主、スミノヤウナ^主クモニ^主(カクレタ)
 マタ^主デタ^主月ガ^主。
 マルイ^主マルイ^主マンマルイ^主、ボン^主ノヤウナ^主月ガ^主デタ^主。

八、すべて韻文は句法音韻等に一定の制限があり、且簡潔な語句の間に多くの思想感情を含ませてあるから、教師は先づそれをよく味ひ、一方兒童の内面生活を理會し、然る後之を取扱つて其の情趣に活かしめるやうにしなければならぬ。従つて語句の取扱に於ても、餘りに知的に分析することとを避け、其の韻文の全生命の分化として取扱ふやう注意しなければならぬ。

九、文字語句の練習應用例は次の如くである。

「月」幾回も書かしめる。「ヤウ」假名遣の練習。
 「マルイ」マルイ、ボン、マルイ、イケ、マルイ、カガミ……等
 「マンマルイ」マンマルイ、ボン、マンマルイ、イケ……等
 「ヤウナ」ワタノヤウナ、ユキ、カガミノヤウナ、ウミ、ユキノフルサマ、ハトリ
 ノケガヒラヒラト、オチルヤウデ、アリマス。

一〇、補習文

○月
 ニイサン、デテ、ゴラン、ナサイ。月、ガ、デマス。スギノ、キノ
 アヒダ、カラ、ダンダン、アガツテ、キマス。モウ、スツカリ、ノボリマ
 シタ。一メン、ニ、アカルク、ナリマシタ。マルデ、ヒルノ、ヤウ、デ
 アリマス。

乙、教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

背景的談話と繪畫と相提携して月の觀念、月の上る有様、月夜の美觀等につき思想を整理する。

(注意)背景的談話については教授上の注意部参照。

二、通讀

以上の思想感情に活きた其の心理状態の下に第一節を讀ましめる。

三、語句内容の玩味

語句につき其の意義を問答し、次に本節の内容を玩味させる。

(注意)此の際、月_{ツキ}の漢字の書方及び「ヤウ」の發音假名遣を授ける。

四、讀方練習

個讀又は齊讀。(可成多く讀ましめる)

五、全文の書取

全文を綺麗に書取らしめる。書取つた後は一二回それを見て讀ましめる。

六、内容の表出

本節の内容を話さしめる。

七、語誦

書物を離れ空で朗讀させる。

第二時

一、掛圖觀察

掛圖を觀察せしめ、過去の經驗と交渉して、雲の觀念、浮動する有様、月が雲にかくれたる時の光景等につき思想を整理する。

二、通讀

以上の思想に活き感興に動いた其の心理状態の下に第二節を讀ましめる。

三、語句内容の玩味

語句につき其の意義を問答し、次に本節の内容を玩味させる。

四、讀方練習

個人的に又一齊的に可成多く讀ましめる。

五、全文の書取

全文を綺麗に書取らしめる。書取つた後は一二回それを讀ましめる。

六、内容の表現

本節の内容を彼等が習得した程度に於て自由に發表せしめる。

七、語誦

書物を離れ空に朗讀させる。

第三時

一、掛圖觀察

掛圖を示し月夜の光景につき感得したる所を自由に話さしめる。

二、通讀

各自自由に第三節を讀ましめる。

三、句内容の玩味

本節は第一節と同様であるから、語の意義及び本節の内容につき復演的に玩味させる。

四、讀方練習及び書取

綺麗に書取らしめ、後之を各自に讀ましめる。

五、練習應用

1. 全文の書取。(可成空で書かしめる。)

2. 語句の應用。(填充法書取法短文作爲)

「マルイ」「マンマルイ」

「クロイ」「マツクロイ」

3. 「月」及び「ヤウ」の練習。

「ボ」
「ス」
「ヤウナ」
「ハ」
「ナ」
「……」等。

第四時

一、全文の復習

1. 一回讀ましむ。2. 主要語句につき問答。(3)内容の玩味。

二、語誦

交るゝ全文を誦讀せしむ。

三、補習文の讀解

1. 一讀せしむ。2. 語句の問答。3. 朗讀。

(注意)補習文は別に授けてもよい。本案はそれに對する餘裕は存してある。

備考

月——太陽に對して太陰とも言ふ。地球に最も近き天體で、地球の周圍を繞りつつ、地球と共に太陽の周圍を運行する。月は自ら光を發するのでなく、太陽の光を受け之を反射して輝くことは言ふ迄もない。

月は太陽と地球とに對する位置によつて種々の形を呈する。これを月の盈虧といふ。普通其の形によつて新月(三日月)弦月(弓張月)滿月(望月)等の名がある。十五夜の月は其の形眞圓で、之を滿月とも望月とも名月とも言つて居る。

月夜の光景は日出日没の光景と相並んで、宇宙の三大美觀である。固より月は日に對し、靜的で、女性的であるから、偉大莊嚴の光景はないけれども、幽靜閑雅の妙趣は月によつて始めて味ふべきである。殊に四季によつて其の趣を異にして居る。就中仲秋の明月は、月見とて、花瓶に尾花を挿し、盆に團子、枝豆等を載せて月に供へ、酒宴其の他種々の催しをして夜更くるまで賞するは我が國古來からの習慣である。獨り我が國のみでなく、月を賞するは古今萬國同一である。

詩題に上り、重題に入り、月に關する名詩、名歌、名文が少くないのである。
雲——水蒸氣の凝縮して細微な水分となり、之が相集つて、空中に浮游するもので、其の色あるは太陽の光線を反射するによるのである。

雲の種類にはおよそ七ある。即ち上層雲と下層雲とに分ち、上層雲には卷雲、卷積雲、卷層雲の三、下層雲には積雲、層積雲、積層雲、及び亂雲の四である。卷雲は羽毛狀又は纖維狀の觀を呈し、非常な高所に存在する雲である。積雲は夏季に多く起り、山岳の重疊するが如きもので、俗に入道雲といつて居る。層雲は地面近く横たはる雲で、天氣晴朗なる夏の朝夕に屢々現はる。亂雲は雨

雲ともいひ、暗灰色を帯び、一定の形なく、常に降雨を來すものである。

雲には一定の形なく、従つて種々の形狀を呈し、また其の色も様々である。其の出現は隨々に天空の變化で宇宙の一美觀である。

第六 川

要旨

形式上——「ユフベ」「大アメ」「コンナニ」「マシマシタ」「マルキバシ」「カカツテ」「マダ」「ヤマナイ」ノ「デセウ」等の語句の意義用法。「川」「山」の新字の讀方書方。「ユフベ」「ミヅ」「シマヒ」「マシタ」「デセウ」等の假名遣。雨後に於ける河流及び山の有様について記した文章の讀解に習熟せしめる。

内容上——山川の觀念及び雨後に於ける河流の有様、山の有様について知らしめる。

区分

- 第一時 第一・二節 自十三頁始行形式及び内容の教授。
- 第二時 第二節 自十四頁終行形式及び内容の教授。
- 第三時 全文の復習。

教具

本文の内容を表はしたる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本教材は舊讀本にある「カハ」の文章を全く書きかへて茲に掲載したものである。舊讀本にあつては、其の挿繪と文章の内容とから考へて、河水の源。本流と支流。河流と魚族との關係等を知らしめ、地理的基本觀念を養ふことが其の要求となつてゐた。然るに修正にあつては單に河流と、雨雲に蔽はれた山の有様と、間接に河流の源はあの山にあるといふことを知らしめ、地理的基礎觀念を養ふことが其の要求になつて居る。尋一といふ發達階段の兒童には此の位の程度が寧ろ適當と思ふ。只茲に問題になるのは雨後の川でなくても、平日の川でもよいではないかといふことである。併し茲は著者の意を用ひた點で、雨後の川によつて河水と雨との關係等を知らす外に、雨後の河は、天地騷擾後の河であるから、水勢滔々として兒童の注目を新にする所に、生氣もあれ

ばまた面白味もあるからである。

二、本課の内容たる雨後の河流、雨雲に蔽はれた山の有様を説く前に、どうしても活きた經驗が欲しい。一般兒童の過去には幾度か此の現象が去來して居るに相違なきも、子供のこと故甚だ漠然たる經驗として殘留するに過ぎぬ。故に更めて此等の現象を直觀するの機會を與へたい。従つて可能の地方にあつては、教授にかかる幾日かの前から豫め注意して、此の現象を捉へて直觀するやう約して置くがよい。而して教授の當日は此の經驗に基いて思想を整理する方案を執る。斯く言ふと何だか物好きな遣方のやうに聞えるが、私共の考は、實事實物の對照ある知識即ち感覺的知識はどうしても其の對象たる實事實物を通して與へたいと思ふのである。兎角東洋人の頭には感覺的知識にして、其の感覺物の背景なき架空的の知識が多いのである。即ち生活上生命のない知識が多いのである。これ全く因襲的に囚はれて來た教授法の缺點である。故に私共は感覺的知識に對しては出来るだけ、其の對象たる實事實物を通して與へたいと思ふのである。故に本案の如きも決して物好き半分に云爾するのではなく、眞劍の叫である。此の點は誤解なきやう特に注意

を喚起して置くのである。

三、そこで本課の内容は次の範圍程度に於て、彼等の經驗を主として平易に整理する。

川——地面が窪んでそこに水が常に連続して流れて居る所。其の水は山より出て野原を通り、村を過ぎ、町を過ぎ、流れ、遂に海に注ぐこと、此の内容の表はれた掛圖用意。雨の降つたときは水量殊に嵩まつて、其の勢凄しきこと等。

山——地面が高く突き立つた所。連續して我が住む周邊の近くに又は遠くにある。樹木繁茂し、河水は多く此處から發すること等。

雲——空中に浮游するもので、一定の形はないが、様々の色を呈する。雨雲は暗灰色で、天一面にひろがつて雨を降らす、雨後は斷片のもの尙去來して一部に雨を下すこともある等。

四、文字・語句については次の諸點につき注意し、適切に授けるがよい。

「川」象形文字で水の流れるさまを象つたものである。「カハ」の漢字には「河」といふのもあるが、「川」と「河」の區別は、「川」は流れる川のこと、「河」は黄河のこと即ち

支那北方の大川の義である。併し今は河を川の義に用ひる。音は「セン」で訓は「カハ」である。運筆の順序は「ノ」である。

「山」象形文字で山の形を象つたものである。漢音は「サン」で吳音は「セン」で、訓は「ヤマ」である。運筆の順序は「丨」である。「川」「山」は共に新字であるから確と記憶せしめる。

「ユフベ」言海には「昨夜をいふはユウベなり」とある。辭林等には「ユフベ」は「夕方昨夜」としてある。茲にいふ「ユフベ」は夕方ではなく、昨夜を意味するのである。昨夜の意味は兒童には存外漠然と意識されて居るから、今日を基本として其の觀念を明瞭に與へるがよい。地方によつては「ヨンベ」といふ所も多くあるから、此等の土地ではこれと交渉して明かにするがよい。

「大アメ」これは雨の大なるを意味するのでなく、大に雨降るを意味するのである。大雨盆を覆すといふ凄き光景を想起せしめるがよい。

「ミヅ」——假名遣に注意。

「コンナニ」——「コノヤウニ」の約りたるもの。文語の「斯くの如くに」に相當する。適用と相俟つて其の意味用法を明かにするがよい。

「マシマシタ」——「フェル」即ち多くなつたの意。地方によつては「マシマシタ」といふよりも「フェマシタ」といふ方が普通になつてゐる所もある。こんな所では二者對照して其の意味を明かにするがよい。此處では河水増加して水勢滔々として流れ居る有様を想起させるがよい。

「大キナイシ」——「大キナ」は「大キナル」の「ル」を省いたもの、「大キ」といふ形容詞の語根に「ナル」といふ指定助動詞を添へたものであれども、今は熟して形容詞となれるものと見てよい。「大キナイシ」はどんな石か想像がつかぬから、教師は適當に假定して、何かに比較して知らしめることにしたらよい。平生は其の石が大半現はれて居るが、今朝は全く隠れて見えない、いかに前夜は大雨で河水が増加したかは、これによつてもよく分るといふやうに説明するがよい。

「マルキバシ」——一本の丸木を渡して橋とせるもので、農民が其の川を渡つて向ふへ行くためにかけた簡単な橋として知らせる。

「シマヒマシタ」——流れて現にそこに無いことを意味して居る。「ナガレテシマフ」と比較して其の意味を明かにするがよい。

「クモガカカツテ」——「カカツテ」は「カウムル」「カブサル」の意で、山が尙雨雲あまぐもにおは

れて居る有様をいふのである。此處では此方は最早雲切れて雨は晴れたけれども、彼方かたの山地には黒い雲が山を蔽ひ、尙雨が降つて居る有様を想はしめるがよい。

「マダ」——副詞で「イマダ」の略である。其の時が尙續いてゐる意味である。

「ヤマナイノデセウ」——「ヤマナイ」は雨がまだ降つてゐるの意。「ノ」は名詞の代りに用ひる助詞。「デセウ」は指定助動詞の將然形、「ウ」は未來助動詞の將然形、茲は「ヤマナイデアラウ」の推量を表はしたのである。適用と相俟つて其の意味を明かにするがよい。

五、文字語句の練習應用例。

(1) 文字の練習書取法

大キナ川 川ノミヅ 川ノ口 タカイ山 ヒクイ山 山ノウヘ

(2) 語句の適用填充書取法(短文作爲等)

(イ) コンナニ——ユフベノカゼデ、キノエダガコ、ンナ、ニラレマシタ。

(ロ) マシマシタ——ユフベノアメデ、イケノミヅガマシマシタ。

(ハ) ナガレテ——マリガナガレ、テイキマシタ。

- (ニ)「シマヒマシタ」——マリガナガレテシマヒマシタ。
- (ホ)「カカツテ」——月ニクモガカカツテキマス。
- (ヘ)「マダ」——マダヒガクレマセン。マダヨガアケマセン。
- (ト)「ヤマナイ」——ケサカラマダアメガヤマナイ。
- (チ)「デセウ」——川ノミヅガドコヘナガレテイクハデセウ。

(3) 假名遣の練習(誤正法)

「ユウベ」「ミズ」「ミエマセン」「シマイマシタ」「カカツテイマス」「ヤマナイ
ノデシヨウ」……等。

六、補習文。

○オホミヅ

アメ ガ イクニチ モ フリツヅキマシタ。川 ニハ ニゴツタ ミ
 ズ ガ オソロシイ イキホヒ デ ナガレテ キマス。
 ツツミ ガ キレテ、タ モ ハタケ モ 一メン ニ ウミ ノ ヤ
 ウ ニ ナリマシタ。
 タイコ ラ ウツ オト、人 ノ サケブ コエ、ドヘウ ラ ハヨブ

(乙) 教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を示し、兒童の過去の經驗と相交渉して、川の觀念、雨後の河流、山の觀念、雨雲に蔽はれたる山の有様につき思想を整理する。

二、通讀

今讀む文章は今話した内容に基いて書いた文章なることを告げ、各自をして一讀せしめる。

三、文字語句の教授

通讀したる後、わからぬ所を質問させ、また教師よりも質問して、次の文字及び語句の意義を明かにする。

「川」の讀方書方。「ユフベ」「大アメ」「コンナニ」「マシマシタ」「大キナイシ」
 「マルキバシ」「ナガレテシマヒマシタ」……等

四、讀方練習

二三の兒童を指名して讀ましめる。また齊讀をもさせる。

五、内容の玩味

第一節の内容を明かにする。

「昨夜覆盆の大雨であつたが、今朝起きて見ると河水増加し、混濁の水が滔々として流れ居るの意」

第二節の内容を明かにする。

「河水増加のため、半ば以上も現はれて居た大岩も全く水に隠れ、丸木橋も流れて其の行方分らず、水勢滔々して凄く流れ居る意」

六、朗讀

四五の兒童をして讀ましめ、また一齊的にも讀ましめる。

七、語句の適用等

(1) 漢字「川」の練習。(2) 假名遣の練習——「ユフベ」「ミヅ」「シマヒマシタ」等。

(3) 語句の適用。

「コンナニ」「マシマシタ」「ナガレテシマヒマシタ」

(注意)教授の注意部参照。

第二時

一、復習

前習の内容及び形式上の復習。

二、掛圖觀察

掛圖を示し、兒童の經驗と結合して、山の觀念及び雨雲に蔽はれてゐる山の有様につき思想を整理する。

三、通讀

各自をして第三節を自由に一二回讀ましめる。

四、文字語句等の教授

通讀したる後質問により次の文字語句等の意義を授ける。

「山」の讀方書方。「カカツテキマス」「アチラ」「マダ」「ヤマナイノデス」等の意義。

五、讀方練習

二三の兒童を指名して讀ましめる。また全體をして齊讀をもなましめる。

六、内容の玩味

問答により、此方は雨晴れて空には只斷雲が走つて居るのみであるが、彼方の山上には黒雲尙空を閉ざして、雨がまだ晴れぬ有様を知らしめる。

七、朗讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また一齊的にも讀ましめる。

八、語句の適用等

- (1) 漢字「山」の書取。(2) 假名遣の練習——「ノデセウ」キマス……等。
- (3) 語句の適用。

「カカツテ」「アチラ」「ヤマナイノデセウ」……等。

(注意)教授上の注意部参照。

第三時

一、復習

(1) 内容上の復習。(2) 形式上の復習——讀方。語句の意義。漢字及び假名遣等。

二、練習應用

(1) 語句の適用。

(前出の分を適宜に)

(2) 文形の應用。

(イ) ……デ、…ガコンナニマシマシタ。

(ロ) ……モ、…ミエマセン。……モ、…シマヒマシタ。

(3) 誤文訂正。

(注意)教授上の注意部参照。

三、話方の練習

本文の内容を各自が知つた程度に於て話さしめる。

四、補習文の讀解

(1) 各自をして讀ましめる。(2) 文意につき問答。(3) 朗讀。

(注意)補習文は別に離して授けてもよい。

備考

川—地表に下つた雨水、或は地中から湧出する泉水が次第に低きに就き、海又は湖沼に達する

通路を川といふ。

川は普通上流・中流・下流の三つに分つ。上流とは山間を流下する部分をいふので、

1. 傾斜急にして水勢速なること。
2. 従つて瀑布・急湍に富むこと。
3. 底深く川幅狭きこと。

等は其の特徴である。中流とは山地を離れて丘陵の地を流れる部分をいふので、

1. 傾斜漸くゆるく水勢も従つて緩なること。
2. 水量は増加し、河水は迂餘曲折すること。
3. 河幅次第に其の廣さを増すこと。

等が其の特徴である。下流とは低地を流れる部分をいふので、

1. 傾斜極めてゆるやかで、且水勢も頗る緩なること。
2. 水量益々多く河幅も廣大なること。

等が其の特徴である。

山——陸地の著しく隆起せる部分を山とも山岳ともいふ。其の高度及び地形に基いて、高山・低山・丘陵の別がある。高さはすべて海面より測定する。山その發生の原因によつて、褶曲山系と火山貫山系との二とする。前者は地球の冷却するに當り、内部の收縮・外部の收縮よりも甚しきにより、恰も果實の乾燥する際に於けるが如く、外層に數多の褶曲を生じたもので、數百里から二千里に及ぶものがある。而して其の褶曲にも一條なると數條なるとある。緩急その度を異にして居る。古世紀山岳とて、古世紀時代の山岳はこれである。後者は地勢の急激なる作用即ち火山の噴出によるもので、富士山の如きは此の適例である。

山は森林に富み、岩石も多く、また内には金銀銅鐵等の礦物を藏するものもあつて、人生との關係が頗る大である。河は多く源を此處に發して居る。
(日本家庭百科事彙参照)

第七 ヨクノフカイ 犬

要旨

形式上——「犬」水の新漢字の讀方書方。「サカナ」「ホシク」「ワン」「コエ」「ホエマシタ」等の語句の意義用法。「クハヘテ」「ツヘ」「コエ」「ホエマシタ」等の假名遣。及び慾張犬の行動を敍した文章の讀解に習熟せしめる。

内容上——「影を捉へて實物を失つたといふ」一種の寓話を通して、感興を動かすと同時に慾深きものは却つて損を招くといふ教訓に觸れしめる。

区分

第一時 全文の通讀及び主要語句の意義等を授く。

第二時 内容の玩味及び讀方練習。

第三時 練習應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本課はイソップ物語にある「影を捉へて實物を失ふ」といふ一つの寓話を採つて教材としたので、要旨は貪慾を誡めるにある。
- 二、童話及び寓話の本質及び之に基く取扱法は修正尋常小學讀本教授細案卷一第十「サルトカニ」二〇四頁及び第十三「ウサギトカメ」二三二頁に詳しく論じて置いたから、就いて其の部を参照ありたい。
- 三、犬の内容については第一卷に於て既に習つて居るし、また寓話は教訓が主であるから、殊更に説く必要はない。専ら本文章を讀んでそこに流れて居る教訓に觸れしめるがよい。
- 四、そんな理由から本課は先づ掛圖を示し、これは何でありますか——犬。口にくはへてゐるものは何か——さかな。犬は今どこにゐるか——橋の上。

水にうつつてゐる影は何の影か——犬の影。
どの犬の影か——橋の上に居る犬の影。

といふやうに問答して、

「さあ、今からここに面白い事が始まるのであるが、それは今から讀まうとする所に分り易く書いてあるから、讀んで知ることによしよう」

と告げて、各自をして一度之を讀ましめ、

「どうです、分りましたか。どんなことであつたらう」

と問ひかけて、不完全でもよいから、其の心に印した所を一二の兒童に言はしめ、それから、

「なほ詳しく、先生と共に調べて行かう」

と告げて、質問によつて語句等の意義を明かにし、全文を二三回讀ましめ、それから内容を吟味して、そこに流れて居る教訓に深刻に觸れしめるといふ手順に出るのは最も上乘と思ふのである。

五、内容の玩味は大體次のやうに取扱つてよからう。

「犬ガサカナヲクハヘテ、ハシノウヘニキマシタ」——此處では「或一匹の犬が他

所の家にあつた魚を一匹盗みとり、そこでたべては若し見付けられるとひどい目に合ふから、人の居ない安全な場所に行つてたべようと思つて、どんく逃げて、或橋の上に来かかつたのである」と知らせる。

「シタヨミルト、ミヅノナカニモ、サカナヲクハヘタ犬ガキマス」——此處では、ひよつと橋の下を見ると水の中にも自分と同じ犬が矢張自分と同様な魚一匹くはへて居ると知らせる。

「ソノサカナモホシクナツテ、ワントーコエホエマシタ」——此處では、元來慾の深い奴であつたから、一匹もつて居るにもかかはらず、其の魚をも我が物にしやうといふ所から、ワンと一聲吠えたのである」と知らせる。

「ホエルト、クハヘテキタサカナハ水ノナカヘオチマシタ」——此處では、慾にもう目がくらんでゐるから、今吠えたら自分のくはへてゐる魚が水の中に落ちるといふことに氣がつかぬ。ワンと吠えると、折角たべようと思つて此處までもつて来た魚がジャブンと水の中に落ちてしまつた。」と知らせる。

六、斯う活寫した後に尙引續き、

1、犬が折角喰べようと思つて此處までくはへて来た魚がどうして河に落

ちたのであらう。

2、何故に吠えたのだらう。

3、慾を起した結果どうなつたか。

4、慾を起して損したのか、益したのか。

5、之を見てゐた人は何と思つたでせう。

と問答して、内に流動する教訓に觸れしめる。人によつては此の取扱が兒童の感興を冷すといふ人もあるが、寓話の本質上斯く取扱ふのが當然である。初め情的に味つて後に知的に判断したからとて何も不自然なことはない。寧ろ材料の本質に顧みた必然的な取扱法なのである。決してそれ等の批評に迷ふことは要らぬ。

七、文字・語句等については大體次の諸點に注意して授ける。

「犬」——象形文字でイヌをかたどつたのである。音は「ケン」で訓は「イヌ」である。大とも比較して確實に読みと書方とを知らせる。

「水」——象形文字で、河水の流動するを象つたのである。音は「スキ」で訓は「ミヅ」である。確實に読みと書方とを知らしめる。

「ヨクノフカイ犬」——「ヨク」は物があつてもあつても尙其の上に欲しがる心である。従つて「ヨクノフカイ犬」は一つ物があつても其の上に尙一つも二つも欲しがる犬の意である。

「サカナ」——「サカ」は酒。「ナ」は魚や菜の稱である。酒飲むときに食する肉菜を「サカナ」といふのである。併し其の内でも魚類を最も多く用ひるから、遂に魚だけの異名として用ひるに至つたのである。但し之は参考のために記したので、兒童には具體的に魚類の二三を擧げて其の觀念を明かにするがよい。

「クハヘテ」——口に軽くかみもつの意。假名遣にも注意させる。また適用によつて一層其の意味と用法を明かにする。

「ハシノウヘ」——橋には木の橋土の橋石の橋等いろいろあるが、茲では挿繪により丸木橋として取扱ふがよい。丸木橋は前課にあつたから別に説明するに及ばない。

「シタヨミルト」——「シタ」は勿論橋の下である。「ト」は條件の關係を表はす助詞である。「ミレバ」と略同意にある。

「ミヅノナカニモ」——「ニモ」の「ニ」は位置を示し、「モ」は事物の同じ状態を並べて言

ふ助詞である。茲は

橋の上にも魚をくはへた犬が居る。

水の中にも魚をくはへた犬が居る。

といふやうに、同じ状態を並列するにつかつたのである。

「ホシクナツテ」——「ホシク」は形容詞の連用形が副詞に轉じたもの。「ナツテ」は「ナリテ」の音便である。「ホシクナツテ」は犬の貪慾性を現はし、失敗の原因を含む句であるから特に注意して授ける。

「ワント」——「ワン」は犬の吠聲。「ト」を加へて副詞とせるもの。修辭上から言へば聲喩法である。前習「コココト」「ビョビョト」とも對象して其の意味を一層明かにするがよい。

「ニコエ」——は一つの聲でなく、一たびの意味である。

「ホエマシタ」——漢字には吠吼等の種々あるが、いづれも獸類の「ナクコエ」である。併し

吠——は主として犬、牛等。

吼——は主として虎、獅等。

に用ひて居る。茲では「ホエル」とは犬などのなく聲であると知らせる。序に雀など鳥のなく聲に之を用ひぬといふことを注意してもよい。「ワントーコエホエマシタ」は犬の失敗即ち貪慾から損を招くといふ原因たる句であるから特に注意して授ける。

「ソノ」——代名詞としての職能をよく知らしめる。

八、文字・語句の練習應用例。

(1) 漢字の適用書取によつて)

犬——大キナ犬 人ト犬 犬ノカゲ ハシノウヘノ犬……等。

水——川ノ水 水ノ上 水ノナカ 水ヲノム……等。

(2) 假名遣(誤文訂正)

犬ガサカナヲクワエテキマス。ハシノウエニ犬ガキマス。ミズノナカニ犬ノカゲガミエマス。犬ガワンワントホエテイマス。犬ノナクコエガキコエマス。……等。

(3) 語句の適用書取又は短文作爲

「クハヘテ」——ネコガサカナヲクハヘテイキマシタ。

「ホシクナツテ」——オナカガスイテ、ゴハンガホシクナツテ、キマシタ。

「ニコエ」——ワカイニハトリガニコエナキマシタ。

「ホエテ」——犬ガワンワントホエテキマス。

「オチマシタ」——マリガ水ノ中ニオチマシタ。

九、補習文。

○ヨクノフカイシシ

シシ ガ マルク ナツテ、ネテ キル トコロ へ、ウサギ ガ トホ
リカカッタ。シシ ガ 一口 ニ タベヨウ ト シタ トコロ へ、シ
カ ガ トホリカカッタ。シシ ハ 小サイ ウサギ ヨリ ハ 大キナ
シカ ノ ハウ ガ トク ダ ト オモツテ オヒカケタ。シカシ ナ
カナカ ハヤクテ、オヒツク コト ガ デキナイ。ソコ デ アキラメ
テ、モト ノ ウサギ ノ トコロ へ モドツテ キタ。シカシ ウサギ
ハ モウ ドコ ニ イッタ カ、カゲ モ カタチ モ ミエナカッタ。

(乙) 教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖につき

これは何(犬を指し)。口にくはへてゐるものは。犬は今どこにゐるか。水にうつつてゐる影は。どの犬の影か……等

と問答して、

「ここに今から面白い事が始まるのであるが、それは今から讀まうとする所に分り易くかいてあるから、讀んで知ることにはませう。」

と告げて讀むことにする。

二、通讀

(1)各自をして一回通讀せしめる。(2)分つた所を話さしめる。

三、文字語句等につき教授

質問により次の文字語句につき讀方書方意義等につき授ける。

「犬」の讀方書方。「ヨクノフカイ犬」「サカナ」「クハヘテ」「シタヲミルト」「ソノ」

「ホシクナツテ」「ワント」「一コエ」「ホエマシタ」……等。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

五、語句の意義等につき復習

主なる語句假名遣につき復演する。二三兒童を指名して讀ましめる。

第二時

一、復習

各節に讀ましめ、其の節に於ける語句等につき問答し、最後に全文を齊讀せしめる。

二、内容の玩味

教授上の注意部に示した内容吟味の内容を参照して、内容を玩味し、内に流動する教訓に觸れしめる。

三、達讀

内容を心に浮べながら各自に二三回讀ましめ、のち二三兒童を指示して朗讀

せしめる。

四、練習・應用

(1) 漢字「犬」「水」の練習(練習例は教授上の注意部にある)

(2) 假名遣の練習(同上)

(3) 文形の適用。

(イ) ハシノウヘニタツテ、シタヲミルト、水ノナカニモジブンノカゲガアリマ
ス。

(ロ) ウマハヒンヒントイナナキマシタ。スズメハチウチウトナイテキマス。

(注意) 以上は口唱して書取らしめ、後「シタヲミルト、ミヅノナカニモ犬ガキマス」
「ワントーコエホエマシタ」の原文形と對照して、文形の變化につき知らしめ
る。

五、話方

時間に餘裕あれば挿繪につき其の知つた所を話さしめる。

第三時

一、復習

一回讀ましめて主要語句につき問答する。

二、内容の發表

各節につき、其處に含まれてゐる内容を彼等が味つた儘に發表させる。

三、朗讀

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

四、語句の適用

「クハヘテ」「ホシクナツテ」「ーコエ」「ホエテ」「オチマシタ」…等。

(注意) 取扱法及び適用例は教授上の注意の部参照。

五、補習文の讀解

通讀。 内容玩味。 朗讀…等。

(注意) 既に記した如く、補習文を讀む時間がなかつたらば別に時間をとつても
よい。

備考

犬と影——犬が肉を啣へて、小橋を渡りますと、鏡のやうに綺麗な水に自分の影が映つたので屹

度他の犬だと思ひ、其の肉も自分のより大ききうでしたから、俯いてそれを取らうとしました。其の拍子に啣へてゐた肉が口から落ちて、水の底に沈み、取返しにつかぬ損をしました。

訓言 影を捉へて、實物を失うな。

解説 此の話は言ふまでもなく、過度の欲を戒めたものですが、それ以上尙深い意味をも含んで居るやうです。即ち多くの人が、妄想の利益に迷うて、實際掌裡に在る幸福を利用することな心がけぬために、骨折つた結果が、虹蜂取らずになつて了ふと言ふ事を諭してあるので、大きな利益にありつかうとして、却つて大きな損失を招くことがあるのですから、徒に人の評判などに浮されて、餘計な事に手を出すより、矢張今有るものを出来るだけ活用した方が安全でありませう。(上田博士著新譯伊蘇普物語)

第八 サルト月

要旨

形式上—「サル」月「タニ川」キンノマリ「ウカシタヤウニ」ツカム「ヨガアケマシタ」等の語句の意義用法。「ウヘ」「ヤウニ」「ミエマス」「トウトウ」等の假名遣。及び猿猴が水中の月を捉へようとしたことを敘述した文章の讀解に習熟させる。

内容上—深山幽境に一疋の猿が水中に浮ぶ月を捉へようとして、遂に曉に及んだといふ面白い話と、峯高く月清く、谿谷の深淵其の影を宿し、一疋の猿猴之に

戯れるといふ自然の美しき配合とを味はせる。

区分

第一時 全文の讀方及び主要語句の意義等を授ける。

第二時 全文の内容玩味。

第三時 復習及び應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本教材は僧祇律に基ける話で、諸書に出て居る。皎々たる明月が水にその影をうつし、猿猴が手を伸ばして之を捉へようとし、遂に曉に及んだといふ面白い話である。これは猿の淺智恵として笑ふよりも、深山幽谷に於ける清き戯として取扱ふことが、頗る詩趣がある。私共は文旨を茲に置いて取扱つて見たいと思ふ。

二、そこで本課も前課の如く、先づ掛圖によつて、

これは何—猿。

これは—月の影。

猿は今どうしてゐるか—手を伸ばして月を捉へようとして居る。

といふやうに簡短に問答して、

「今から習ふ所は此のことにつき面白く書いてあるから、讀んで知ることにしてしよう」

と告げて、一回通讀せしめ、主要語句について問答し、更に一二回讀ましめ、それから教師の感想をも加へて内容について問答し、更に數回讀ましめ、そこに此の清き戯の内容を味はせるといふ順序に取扱つて行くのである。

三、内容の玩味は大體次の如く取扱つてよい。

「サルガキノウヘカラタニ川ヨミルト」此處では、人が住む村里を遠く離れた奥山の峯の上に深夜の月が白く清く輝いて居る。下には谷川の水がさらさらと音を立てて流れて居る。水の淀んだ深い淵に空の月影が美しく映つて居る。一疋の猿が崖から垂れた樹の上から其の水の面を見る」と知らせる。

「月ガ水ニウツツテ、キンノマリヲウカシタヤウニキレイデス」此處では、谷川

の水が淀んで深き淵になつて居る。その淵に映つて居る月影はまるで黄金の毬を浮べたやうに、本當に綺麗である」と知らせる。

「サルハテヲノバシテ、水ノナカノ月ヲツカミマシタ」此處では、猿がしばらくじつと水面の月影を眺めて居たが、如何にも美しい黄金の毬である。どうかして之をとつて我が物にしたいと思ひ、水面に垂れかかつた枝を傳うてつるゝと下りて來て、片手を伸ばして水の中の月をシャブツと掴んだのである。」と知らせる。

「ツカムト月ガナクナリマス。」此處では、その黄金の毬をシャブツと手で掴むとどこへ行つたか影も形もない。これは慥か我が手にあるに違ひないと思つて手を開いて見ると水の雫より外に何物もない。」と知らせる。

「テヲヒクトマタモトノヤウニ月ガミエマス。」此處では、水の中にも月がない、我が手の中にも無い。はてどうなつたのか知らん。どうも不思議である、と、水の面を見ると、こは如何に、黄金の毬は元の通り水中に浮んでゐる。」と知らせる。

「ナンベンモナンベンモツカンデキルウチニ、トウトウヨガアタマシタ。」此

處ではよし今度は捉へてやらうと、また手を伸ばしてシャブツと月を掴むと、月影が無くなつた。大丈夫、今度こそ我が手の内にあると思つて、掌を開いて見ると矢張無い。どうもをかしいと思ひながら、水の面を見ると金の毬は元の如く水中に浮んでゐる。これやいよくをかしい。今度こそはと思つて前の如くやつて見ると矢張手には月無うて、水には元の如く浮んでゐる。こんな風に何遍も何遍もやつてゐる内にとうとう東の空が白んで来て、月影も何處にか行つてしまつたのである。」と知らせる。斯く取扱ふことによつて、眞に兒童をして其の詩趣の内に住ましめることが出来るのである。

四、語句については次に示す所に基き、適切に取扱ふがよい。

「キノウヘカラ。」——崖から谷川へ垂れかかつて居る樹の上からといふ意味に取扱ふ。「カラ」は前にも言つた如く、動作の起點を示す助詞である。

「タニ川。」——谷間を流れる水即ち溪流に同じ。谷は山と山との間の低き土地、狭長なる窪地をいふのであるが、此處では山の下を流れる川として知らしめる。

「ミルト。」——此の場合に於ける「ト」は上の條件に對し、下に當然の結果が起る場

合を示す助詞である。適用によつて其の意味を明かにし、用法に習熟させるがよい。

「月ガ水ニウツツテ。」——「水」は勿論谷川の水である。併し流れて居る水でなく、淀んで居る水とする。何となれば流れて居る水であると、月影が碎けて、眞圓まゐまい月として浮ばぬからである。

「キンノマリ。」——この「ノ」は下の名詞の意義を限定して居る助詞である。而して形の限定でなく、色の限定である。金色の月については繪畫によつて示し、具體的に其の觀念を明かにするがよい。「マリ」は勿論月の形をさすのであるが、此處では前に習つたボンのやうな月即ち眞圓の月として取扱ふがよい。「ウカシタヤウニ。」——「ウカベタヤウニ」といふべき所を「ウカシタヤウ」と使つてある點に注意する。「ヤウ」は前にもあつた如く比況の助動詞である。「ニ」が添うて副詞となつて居る。此の語句によつて眞圓の月が丁度金の毬を浮べたやうに水に映つてゐる其の清き實境を想像させるやう取扱ふがよい。「テヲノバシテ。」——一肢を水面に伸ばし、他肢にて樹の枝を捉へて身を支へて居る其の有様を圖によつて知らしめるがよい。

「水ノナカノ月ヲツカミマシタ。」ツカミマシタは動作の進行が終了して居る。水中の月を捉へようとする所はもはや猿に理知のないことを證明して居るけれども、其の故を以て此處を嘲笑的に取扱ふは面白くない。水中の月は眞の月でなく、其の影である。之を捉へようとしても、捉へることが出来ぬ。この不可能事たるを辨へず、欲しいが儘に捉へんとするは、丁度人の幼兒の如くで、其の天真な所に面白味をもたせて説くがよい。「ツカミマシタ」といふ動作の完了した所に面白みが溢れて居る。

「ツカムト月ガナクナリマス。」トは前述の如くである。「ナクナリマス」は茲ではもう月の存在が消滅したことにして取扱ふがよい。即ち水中の月が猿の手によつて碎かれた水に、其の影も碎かれて無くなつたことにして説くがよい。而して尙月が無くなつたから、必定自分の手にあると思つて開いて見たことをも附け加へて説明するがよい。さうすると一層其の天真が現はれて來ることになる。

「テヲヒクト、マタモトノヤウニ月ガミエマス。」ミエマスは感覺が現在に存在して居る。此の點は注意して授ける。此處では手を引くと波紋が直ぐ收

つて、黄金の月がまた元の如く清く浮んでゐる。其の清き實境に子供の心をも引入れるやうに説くがよい。そして尙此處では猿が自分の掌を開いて見ると、月は無うて水の點滴が残つて居るのみである。そして捉へたと思ふ月がまた元の如く水中に浮んでゐる。どうした譯だらうといかにも不審打つことも附説するがよい。

「ナンベンモナンベンモ。」反復法を用ひ、同一のことを終夜くりかへしたことを表はして居る語句として知らしめる。所謂猿智恵であるといつて嘲笑的に其の反復の愚を笑はず、天真な所に面白味をもたせて取扱ふがよい。

「トウトウヨガアケマシタ。」捉へられない月を捉へようとして、幾十回、幾百回となく同一のことをくりかへし、遂に夜が明けたことは、可憐にもあれば、面白き自然の戯れでもある。人里遠き奥山の月下の深淵に此の清き活動は本當に人をして恍惚たらしめるの意味を傳へるがよい。「ヨガアケマシタ」の語は何とも云へぬ味がある。(以上は平易に)

五、練習・應用すべき文字・語句等は次の如くである。

(1) 文形の適用。

(2) 語句の適用。

(イ) ……ト、……。(ロ) ……ヤウニ……。(ハ) ……ウチニ……
 「ウツツテ」「ウカシタヤウニ」「ノバシテ」「ツカミマシタ」「モトノヤウニ」
 「アケマシタ」……等。

六、補習文

○ヤマビコ

アル キナカ ノ コドモ ガ ヤマ ニ クサカリ ニ イキマシタ。
 ナニゲ ナク

「オーイ」

ト イヒマシタラ、ムカウ デモ

「オーイ」

ト イヒマシタ。

「タレダ」

ト イヒマシタラ、ムカウ デモ

「タレダ」

ト イヒ マシタ。

「タレ カ、人 ノ マネスル ノハ。」

「タレ カ、人 ノ マネスル ノハ。」

「マネ ヲ シテ ハ イケナイ デハ ナイ カ。」

「マネ ヲ シテ ハ イケナイ デハ ナイ カ。」

ト ヤツバリ コチラ ノ イフ トホリ ヲ イヒマス。コドモ ハ

タイソウ オコツテ、

「シツケイ ナ。」

「シツケイ ナ。」

ト ヤツバリ オナジ コト ヲ イヒマス。コドモ ハ イヨイヨ

オコツテ アルダケ ノ コエ ヲ ダシテ、

「コノ バカモノ。」

ト サケビマシタ。ムカウ デモ

「コノ バカモノ。」

ト サケビマシタ。ウチ ニ カヘツテ オカアサン ニ キキマシタ

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を示し、簡單に問答して目的を指示する。

二、通讀

各自をして自由に一回讀ましめ、全文の内容に觸れしめる。

三、語句の意義の教授

各節につき主要語句につき問答し、其の意義を明かにする。

四、讀方練習

個人的にまた齊唱的に讀方の練習をなす。

五、語句内容の復演

主要語句、假名遣及び全文の内容につき復演して、其の意義、内容を一層明確にする。

六、達讀

個人的にまた一齊的に十分意味をとつて讀ましめる。

第二時

一、復習

二三の兒童に讀ましめ、次に主要語句の意義につき問答する。

二、内容の玩味

各節に於ける内容につき問答し、同時に教師の感想を加へて、内容を玩味させる。

三、朗讀

内容を十分心に浮べて各自をして自由に二三回讀ましめ、後二三の兒童を指名して朗讀せしめる。

四、話方

讀本を離れ各自が意識に残つたところを語らしめ、傍ら發表法の巧拙等につき批評する。

五、書取

主要語句を口唱して書取らしめる。二三名は塗板上に他は各自の練習帳に書取らしめる。(速寫練習)

キノウヘノサル	タニ川	月ガ水ニウツツテキマス	キンノマリ
ヲウカシタヤウナ月	サルガ水ノナカノ月ヲツカミマシタ	テヲヒ	
クトモトノヤウニ月ガミエマス	トウトウヨガアケマシタ		

第三時

一、復習

一回自由に讀ましめる。各節につき主要語句につき問答する。二三兒童を指名して讀ましめる。

二、内容玩味

兒童に對し、文中どこが面白いかを問ひ、各自が其の面白いと感ずる所を讀ましめ、次に其の感じた内容を話さしめる。此の時教師の所感をも加へる。

三、朗讀

二三兒童を指名して朗讀せしめる。

四、練習應用

(1) 文形の適用

(文形は教授の注意部にあるから参照)

(2) 語句の適用

(適用すべき語句は教授の注意部にあるから参照。また方法は填充法又は書取法によるがよい。)

五、形式と内容との關係的考察

- 1 月が谷川の水に映つて金の毬を浮かしたやうに綺麗な有様をどんな風にかきあらはしてあるか、讀んで答へてごらん。
- 2 猿が手をのばして其の美しい月をつかむと、月がなくなつてしまふ。手を引くとまた元のやうに月が見える有様をどんな風に表はしてあるか、讀んで答へてごらん。
- 3 なんべんもつかんである内にとうとう夜があけたことをどんな風にかいてあるか、よんで答へてごらん。

(注意)補習文は別に時間をとつて授ける。

備考

補習文作爲の資料として次の寓話を記載して置かう。

○日と月

或時月が其の母たる日に美しい着物を拵へてくれと願つた。母の日は

「それはとても駄目だ」

といつた。月は

「なぜです。」

と問うた。日は

「お前の體からだに合ふ着物はどうしてもつけれない。三日月みかづきになつたり、弦月まげつきになつたり、満月みづつきになつたり、其の間には何方どっちにもつかすの體からだをしたりするではないか」と答へた。

第九 木ノハ

要旨

形式上——新漢字「木」「小」「土」の讀方書方。「ハ」「カ」「ゼ」「イロ」「イロ」「ナ」「木」「ト」「ン」「デ」「ク」「モノ」「ス」「フ」「ネ」「ノ」「ヤ」「ウ」「ニ」「チ」「ツ」「タ」「ト」「コ」「ロ」「土」「モ」「ミ」「ヂ」「イ」「ロ」「モ」「シ」「ア」「ツ」「タ」「ラ」「ツ」「ケ」「タ」「デ」「セ」「ウ」等

の語句の意味用法。「マ」「ハ」「ツ」「テ」「ミ」「エ」「モ」「ミ」「ヂ」「ヒ」「ロ」「ヒ」「ト」「ホ」「リ」等の假名遣。木の葉が風に散るさまを敘せる文章の讀解に習熟させる。

内容上——晚秋に木の葉散る自然の一現象に對する美的感情を養ひ、兼ねて木の葉の形狀大小種類色の變化並に氣候と植物との關係等につき其の一斑を知らしめる。

區分

- 第一時 第一段自十九頁至廿二頁一行讀方及び主要語句の意義の教授。
- 第二時 同上の内容玩味及び練習應用。
- 第三時 第二段自二十二頁至二十三頁二行形式及び内容の教授
- 第四時 全文の復習及び應用。

教具

掛圖 木の葉の種々。紙でつくつた紅葉葉。色の五六種。

教法

(甲)教授上の注意

一、本教材は挿繪において多少の變更があれども、文章は殆ど舊讀本の通りであ

る。本課の目的とする所は、我が國晚秋の一美觀たる、木の葉が風に翻々と舞うて落ちる自然の情趣を味はせ、傍ら木の葉の形狀大小色の變化植物と氣候の關係等につき、知的理解の一斑を求めてゐると考へてよい。

二、本文章は大體

(1) 木の葉の散る光景(自始至二十二頁一行)

(2) お花の作業(自二十二頁二行至終行)

の二つに分け、(1)に於ては前にも云つた如く、晚秋に於ける落葉の美觀を、(2)に於ては木の葉の形狀大小色の變化植物と氣候との關係等の一斑について説くことにしたい。即ち前者は主として情的に、後者は主として知的に取扱ふのである。

三、本教材は性質上どうしても直觀に訴ふべき材料である。故に教授の當日又は前日に於て、教材の内容に適合する日を見て、學校園公園社寺校外等に率ゐ、其の實況を直觀させるがよい。而して此の際形の異なる、大小を異にするいろ／＼の葉を拾はしめ、彼等の直接的感覺を通して其の觀念を明確にするがよい。

四、内容は其の第一單元に對しては、

1. 晚秋即ち木枯吹く時候の有様につき

2. 木の葉の黄に紅に變色せし有様につき

3. 木枯に吹かれて翻々と飛ぶ落葉の有様につき

(イ) 空中にくる／＼と舞ふ有様。 (ロ) 蜘蛛の巢にかかる有様(あれば) (ハ)

地上を車の如く走る有様。 (ニ) 水上を舟の如く走る有様。 (ホ) 落葉つん

で地上が埋れた有様。

第二單元に對しては、

1. 葉の種類につき

(イ) 形狀。 (ロ) 大小。

2. 氣候と變色の關係

(イ) 春より夏にかけては—綠色。

(ロ) 秋より冬にかけては—黄に、紅に色が變じ、遂に落つること。

(但し年中綠色を保ち、落葉せぬ樹のあることも、二三の例を擧げて知らしめるがよい)。

等、兒童の發達經驗に顧み、簡單に知らしめることにしたい。

五、文字語句については、大體次に示す所に基き適切に取扱ふがよい。

「木」象形文字で、草木の芽と根とに象つたものである。漢音は「ボク」吳音は「モク」訓は「キ」である。

「小」會意文字で、「八」と「丨」から成つたものである。「八」は分つの義で、「丨」は地上に草がちよつと芽を出した貌である。其の小さき芽を更に分つことになるから、愈、小さくなる譯である。即ち小は細微の意である。漢音吳音共に「セウ」で訓は「チヒサシ」である。

「土」指事文字で、地平線上に草木が芽を出した意をとつて作つたものである。漢音は「ト」吳音は「ツ」習慣的の音は「ド」訓は「ツチ」である。

「カゼガフイテ」カゼは木枯の意である。「フイテ」は「フキテ」の音便。ヒユウヒユウと木枯の吹き凄む有様を想起させるがよい。

「イロイロナ木ノハ」イロイロナは「イロイロナル」の略。「イロイロ」と云ふ合名詞に「ナル」といふ指定助動詞を添へたもので、今は、熟成の形容詞として使ふ。「イロイロナ木ノハ」は其の木の葉のある所に引率した時、實物に觸れしめてこ

の觀念を明かにして置くがよい。

「トンデキマス」トンデは「トビテ」の音便。木枯に吹かれて色々の木の葉が翻騰と飛ぶ有様を會ての經驗から想起させる。

「マルイノモ」ホソナガイノモ「大キナノモ」小サナノモ「ノ」は名詞「モノ」の代りに用ひる助詞。茲はいづれも「木の葉」の代りに用ひ、敘述を簡潔にしたのである。

「モ」は事物を並べていふ時に用ひる助詞である。此處は其の適用を知らしめるに最も都合よき場合であるから、逸すること無きやう注意するがよい。亦對句になつてゐる所も適用によつて知らしめるがよい。

「マルイ」ホソナガイ「大キナ」小サナ「此の形狀大小の相違は可成兒童が日常接觸して居る樹木につき知らしめるがよい。例へば

マルイ——柏・木蓮等。ホソナガイ——柳等。大キナ——桐・柿等。小サナ——梅・櫻等。

である。

「クルクルマハツテ」クルクルは副詞で、下の「マハツテ」を限定して居る。風に翻弄せられて空中にくるくると舞ふ有様をよく想起させるがよい。

「カカル」懸垂の意である。木の葉がくるくまはつて、蜘蛛の巣にかかると、蜘蛛は蟲かと思つてのそのそと出て見ると、それは木の葉であつたと附加して話すも一興である。

「ブネノヤウニナツテ」木の葉が舟のやうな形をしての意である。修辭法の上から云へば一事物を顯はに他の事物に比較して其の相似の點を覺らしめんとする所謂直喩法である。

「チツタトコロハ土モミエマセン」木の葉がそこら一面にちらばつてゐる様子をいつたのである。落花狼藉でなく、落葉狼藉とも云ふべき所である。過去の經驗と交渉して其の實境を想起させるがよい。

「モミヂ」晩秋に至り、どの木の葉でも黄に紅に變色したとき、それをば紅葉したといふのである。併し此處ではお花の拾つたのは挿畫にもある通り、楓の葉として取扱ふがよい。

「マイヒロビマシタ」マイは平にして薄き物を數へるときに用ひる詞である。本文には一枚拾つたとあるが、兒童の實際は逆も一枚位で承知しないだらう。幾枚も幾枚も拾つたに相違ない。此處は兒童の實際から見て批難す

べき點である。

「ソレヲモツテ」ソノカタチニ「ソレ」ソノ職能は重複してもよいから十分知らしめて置くがよい。「ソレ」は事物の指示代名詞で、「ソノ」は「ソ」に「ノ」を添へたもので、矢張事物の指示代名詞である。職能を知らしめるには、

ヒロツタモミヂノハチモツテキテ、

モミヂノハノカタチニキリマシタ。

イロモモミヂノハノトホリニツケマシタ。

の如く比較して知らしめるがよい。

「ソノカタチニキリマシタ」ソノカタチは楓の葉の形に切つたとする。其の方法は、先づ楓の葉を紙の上のせ、鉛筆で輪廓をとり、それから缺で切つたことにする。教師は豫めこれ等の物を準備して兒童の目の前で切つて見せるがよい。

「イロモツノトホリニツケマシタ」色を眞に其の葉の通りに附けるといふことは兒童として不可能である。何となれば其の色を現はすには種々の色を調合しなければならぬからである。故に色については餘り嚴密な意味で取

ドコ カラ キタ ノ カ、
 トンデ キタ 木 ノ ハ、
 クルクル マハツテ、
 クモ ノ スニ カカリ、
 クモ ハ ムシ カ ト
 ヨツテ クル。
 ドコ カラ キタ ノ カ、
 トンデ キタ 木 ノ ハ、
 ヒラヒラ マハツテ キテ、
 イケ ノ ウヘニ オチテ、
 コヒ ハ エサ カ ト
 ウイテ クル。(尋常小學國語讀本卷二に據る)

(乙)教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を觀察せしめ、過去の觀察經驗と結合して、木枯吹く晚秋の空、木の葉散る自然の美觀等につき思想を整理し、感興を惹き起す。

二、通讀

各自をして自己の有する讀書力によつて一讀せしめ、其の内容を捉へしめる。

三、文字語句の教授

質問により、次の文字及び語句の意義を授ける。

木[○]ノハ カゼ イロイロナ木ノハ トンデキマス マルイノモ ホソナ
 ガイノモ 大キナノモ 小[○]サナノモ クモノス カカル フ
 ネノヤウニ チツタトコロ 土[○]……等。

四、讀方練習

個人的に一齊的に數回讀ましめる。

五、語句内容等につき復演

主なる語句につき問答して其の意味を一層確實にする。全體の内容につき知つた所、感じた所を話さしめる。假名遣につき注意。

六、朗讀

二三兒童を指名して朗讀せしめる。

第二時

一、復習

掛圖により晚秋の落葉の光景につき復習的に問答する。二三の兒童を指名して讀ましめる。主要語句につき問答する。

二、内容の玩味

各語句各節及び全文につき問答して内容を玩味せしめる。此の際教師の所感をも語る。

三、讀方練習

個人的に自由に或は指名して讀ましめ、また一齊的にも讀ましめる。

四、内容語句等の復演

主なる語句の意義。全文の内容及び假名遣等につき問答して一層深く感得せしめる。

五、達讀

二三兒童を指名して朗讀せしめる。

六、練習・應用

1. 漢字の練習——口唱書取によつて練習する。
2. 假名遣の練習——同上。
3. 語句の適用——優等生には創作的に短文を書かしめ、其の他のものに對しては教師の作を口唱して書取らしめ、後其の語句の適用につき知らしめる。

第三時

一、復習

此處にては特に次の事項につき復習し、其の觀念を一層明確にする。

1. 色々の木の葉とはどんな葉をいふか——此の問の下に代表的の實物を示し、木の葉の形狀大小の觀念を一層明確にする。
2. 落ちる葉はどんな色をしてゐるか——此の問の下に落葉の色につき二三の實物を示して其の觀念を明確にする。

3 木の葉の落ちるはどんな時であらうか——此の問の下に春より夏にかけては木の葉が緑であるが、秋から冬にかけて、寒さのために葉の色がさめ、黄色にまた紅になつて遂に落ちるといふことを明かにする。

前習の所を各自に一回讀ましめる。次に掛圖を示し、其の後この女の兒がどうしたか、今日はそれを知ることによしよう」と云つて新材料に入る。

二、通讀

各自をして一回讀ましめ、其の内容の何たるかを捉へしめる。

三、語句等の教授

次の語句につき其の意義を明かにする。また假名遣につき注意を與ふ。

モミヂノハ ソレヲモツテキテ ソノカタチニ イロモソノトボ
リニ モシナツデアツタラ ドンナイロ ツケタデセウ……等。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀ましめる。

五、内容の玩味

内容につき問答的に吟味し、教師の所感をも加へて玩味させる。

六、朗讀

二三兒童をして朗讀せしめる。

七、練習應用

(1) 假名遣の練習。(2) 語句の適用。
(注意) 方法は前時に準ずる。

第 四 時

一、復習

前文を二つに分ち指名して讀ましめる。主要語句につき問答する。内容を分解的に問答する——(イ)木の葉の散るはいつか。(ロ)風が吹くときどのやうに散るか。(ハ)どんな葉か。(ニ)どこに落ちるか。(ホ)その落ちた様子は。(ヘ)お花はそれをどうしましたか。(ト)夏ならばどんな色をぬるか。(チ)春と秋とは木の葉がどう變はるか……等。

二、應用

(1) 文形の適用。

(2) 語句の適用。

(注意) 教授上の注意の部を参照し、適當に課す。方法は前に準ずる。

三、補習文の讀解

(1) 通讀。(2) 語句の問答。(3) 内容玩味。(4) 達讀。

(注意) 補習文は別に時間をとつて授けてもよい。本案はそれに對する餘地は残しある。

備考

一、木の葉——樹木の種類により其の形狀・大小種々で一々述べ難いが、普通庭園にある樹木について見ると、

松——針の形。楓——掌の形。梅櫻——楕圓形。柳——細長き楕圓形。銀杏——扇子形……等である。

葉の色は綠色を常とすれども、落葉樹にあつては、晩秋に至り黄又は紅に變じ、遂に落下する。紅葉とは草木の葉が霜に逢ひ木枯に逢ひて、紅にまたは黄に變色するをいふのである。中にも楓は一番赤く染めなすから獨り其の名を擅にして居る。葉の綠色を呈するは葉が綠葉素を有するからである。春の暖氣に遇うて綠葉を開展し、夏に至つて益々繁茂し、盛に同化作用を營めども、秋冷に向へばその作用漸く止み、寒冷に遇うて綠葉素は分解變色し、遂に枝を離れて落下す

るのである。

二、風——空氣の流動によつて起るのである。土地の關係上から見て、陸軟風、海軟風、貿易風、氣候風等がある。速度の上から見て、強風、烈風、颶風、軟風、微風等がある。氣候の上から名づけて、春風、涼風、木枯朔風等がある。

第十 ユフガタ

要旨

形式上——新漢字「火」の讀方書方。「ユフガタ」「ウチ」「オバアサン」「火ヲタイテ」「ゴハン」「シタク」「オヂイサン」「カヒバ」「キドバタ」「山」「シンバイ」「カド口」等の語句の意味用法。「ユフガタ」「モウ」「ユフハン」「カヒバ」「キドバタ」等の假名遣。及び山里の夕方を描寫した文章の讀解に習熟せしめる。

内容上——山里の一家庭に於ける夕方の有様を通して、一家和樂の眞味を味はしめ、兼て共同和親の念を養ふを以て要旨とする。

區分

第一時 第一節 自二十四頁一始行形式及び内容の教授。
第二時 第二節 自二十四頁五行形式及び内容の教授。

第三時 第三節 自二十四頁至二十六頁 行形式及び内容の教授。

第四時 全文の復習及び應用。

教具

本課の内容を表はしたる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

- 一、本文章は舊讀本の文章に多少の斧鉞を加へて載せたことになつて居る。要求は山里の一家の夕方に於ける家人の活動を描き、之を通して、一家和樂の美はしき情味を味はしめ、共同和親の念の啓發に存する。
 - 二、本課の内容は各自の家庭が夕暮になると家人のめい／＼がどんなことをするかを想起せしめ、之と交渉し、掛圖と提携して大要次の程度で整理したらよい。
- 祖父—お祖父さんは、少時から馬が大好きで、馬の世話することが何よりも楽しみだといつてゐる。いつもかひばをやるときは、「たくさんたべたくさんたべ、そして大きくなれ、そして力強くなれ」と、まるで人間に物言ふやうにしてやるのである。馬も祖父さんの姿を見ると、「ヒン／＼」と嘶いて喜ぶのである。茲

は今其のお祖父さんが我が愛する馬にかひばをやつて居る所である。

祖母—お祖母さんは若いときから大層働く方で、お父さんも、お母さんも、もうお年寄であるから、お樂をなさいといつても、樂をするに罰があたるから、これだけでも、身のつく／＼限り家のお仕事の手傳をしなければならぬといつて、毎日々々臺所にて、朝飯や夕飯の仕度の手助をするのである。今もこのやうに竈の下に折角火を焚いて、夕飯の仕度の手助をしてゐるのである。

母—お母さんは毎日々々家の内で、ご飯の用意をしたり、子供のお世話をしたり、家のお掃除をしたり、着物の洗濯をしたりして、朝から晩までくる／＼と働いてゐる。今も夕方になつたから、井戸端に出て、夕飯の仕度に要る水、父さんがもう野山からもどつて来て足洗ふために要る水をかうして汲んでゐるのである。

父—お父さんは、秋の取入れももうすんだから、雪の降らないうちに冬になつて焚く薪をこしらへて置かうと言ふので、お天氣のよい日には、缺かさず山に行つて、樹を切り、枝をおろして、薪をつくつてくるのである。今日もよい天氣であつたから、山にでかけて遅くまで働いて、夕暮になつたが、まだ歸つて來な

いのである。

友吉——友吉は今年は尋常一學年である。たつた一人しかゐないところから、とりわけお父さんにもお母さんにも可愛がられてゐる。友吉もまた大層お父さんやお母さんを慕つてゐる。お父さんはいつも日の暮れない内にニコニコと笑ひながら戻つて来るのを、今日はどうした譯か、お日様が海に沈み、あたりが暗くなつたのに、まだお戻りが無いといふので、大層心配して、今門口にまででて、お歸りを待つてゐるのである。

家族——このやうに友吉の家では、お父さんは外に働き、お母さんは内に働き、お祖父さんもお祖母さんも力の及ぶだけ家の仕事の手助をし、友吉も日々學校に通うて勉強してゐる。家の人みんな心を合せて、家のためになんかの仕事に働いて、楽しく暮してゐるのである。

三、文字・語句等については大要次に示す所に基き適切に取扱ふがよい。

「火」象形文字で、火炎の上騰する有様を象つたものである。漢音吳音共に「クワ」で訓は「ヒ」である。運筆の順序は「ハ」である。

「ユフガタ」日がもう暮れようとする時。「クレガタ」同じ。

「モウ日ガクレマシタ」モウは副詞で「クレマシタ」を限定して居る。「クレマシタ」は太陽がもはや海にかくれ、あたりが暗くなりかかつた時をいふ。此處では短かき晩秋の日がもう海に落ちて、晩鳥がカアカアと啼いておのが時に歸る山里の寂しき暮の様子を想起させるがよい。

「ウチ」家と同意義。廣島あたりでは女子は一般に「私」といふべきを「ウチ」といつて居る。綴方によく「家」と「私」とが混同して表はれる。こんな地方では特にこの區別を明かにするがよい。

「オバアサン」大母サマの約轉で、父の母を敬ひ親みていふのである。丁寧にして且上品に云へば「オバアサマ」である。

「火ヲタイテ」火と「日」との區別を明かに知らせる。「タイテ」は火を薪につけて燃すことである。

「ユフハンノシタク」ユフハン」は夕方になす食事即ち「ユフゴハン」のことである。「シタク」は用意することである。

「オバアサンハ火ヲタイテ、ユフハンノシタクヲシテキマス」此處では年老いたお祖母さんが臺所に出て、やがて開かれんとする一家團樂の樂しき夕ごは

んの仕度に餘念なき有様をよく知らしめるがよい。

「オヂイサン」大父サマの約轉で、父の父を敬ひ親んで言ふのである。丁寧で且上品にいへば、オヂイサマである。

「カヒバ」秣ともいひ、牛馬に喰はせる枯草の類をいふのである。

「オヂイサンハウマニカヒバヲヤツテキマス」此處ではお祖父さんは大層馬が好きで、いつも秣をやるときには、澤山たべ、澤山たべと、まるで人に物言ふやうにし可愛がり、馬まで一家和樂の空氣を吸つて居ることにして取扱ふがよい。

「キドバタ」キドは地を掘つて地下の水をたたへ、これを汲み取るやうに設備した所をいふのである。「キドバタ」は井戸のほとり或は井戸の側の意である。「オカアサンハキドバタデ水ヲクンデキマス」此處ではお母さんが夕方になつたから、井戸端に出て夕飯の仕度に要る水を汲んだり、お父さんが山からもどつて足を洗ふに要る水を汲んで、夕方の仕事に餘念なき有様を知らしめるがよい。

「マダ」副詞で、下の「カヘツテキマセン」を限定してゐるのである。文語の「イマ

ダ」に相當してゐる。

「山カラ」父は山へ柴刈に或は山の畠に仕事にいつたことにするがよい。

「オトウサンハマダ山カラカヘツテキマセン」お父さんは山へ柴刈にいつて日がもう暮れたけれどもどうした譯か、まだ戻つて來ないといふことにし、後の「シンバイシテカドロニデテミマシタ」に照應する句として取扱ふがよい。

「シンバイシテ」もし怪我でもしたので無からうか。谷にでも落ちたので無からうかと、色々心にかける意である。

「カドロ」門の口のこと。田舎の家では悉く門がないから、或は子供の内で想像のつかぬものがあるかも知れぬ。そんな子供には學校の門などを引合に出して知らしめたらよい。門がある所から考へると、友吉の家は中流位の家であらう。

「トモキチハシンバイシテカドロヘデテミマシタ」此處では友吉はお父さんの歸りがいつもになく餘り遅いので、どうしたのであらう。怪我でもされたのでなからうか、山の谷へでもころがつて落ちたので無からうかと、親を思ふ心から、色々心配して門の所へ迎へに出たことにして知らしめるがよい。

四、文字・語句の練習應用例

(1) 漢字の練習書取法

火ヲタク 火ガアル 火ト水 木ニ火 火バシ 火バチ
山ニ火ガミエマス ウミニ火ガミエマス……等。

(2) 假名遣誤正法

ユウガタ ユウハン イドバタ カイバ カエツテ オジイ
サン ヲバアサン 水ヲクンデイマス……等。

(3) 語句の適用(填充法書取法其他)

(イ) シタク「カヘルシタク、オカアサンハアサメシノシタクヲシテキマ
ス。
(ロ) ヤツテキマス」ブンキチハウシニカヒバラヤツテキマス。 オチヨハ
トリニエヲヤツテキマス。
(ハ) クンデキマス」オカアサンハミヅヲクンデ、フロヲケニイレテキマス。
人ガキドノ水ヲクンデキマス。
(ニ) カヘツテキマセン」イヌガマダカヘツテキマセン。 トモキチガツカヒ

ニイツテ、マダカヘツテキマセン。

(ホ) シンバイシテ「オカアサンハトモキチノマダカヘラナイノヲシンバイ
シテキマス。

(ヘ) テテミマシタ「ヘイタイガキマシタカラ、モンノソトヘデテ、ミマシタ。

五、補習文

○ユフヤケ

日 ガ ハイリマシタ。 人 ガ ボツボツ タンボ カラ カヘツテ
キマス。

アチラ ノ ソラ ガ マツカ ニ ナリマシタ。

「ユフヤケ コヤケ、アシタ テンキ ニ ナアレ」

ト、コドモ ガ オホゼイデ、イツシヨ ニ ウタツテ キマス。

(尋常小學國語讀本卷二に據る)

(乙) 教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖を提示し「これは誰。今何をしてゐますか」と言ふ問答の下に、祖父・祖母・父母・友吉の夕方に於ける作業動作につき思想を整理する。
(注意)教授上の注意の部参照。

二、通讀

自由に各自をして一回通讀せしめる。

三、文字語句の教授

兒童をしてわからぬ所を質問せしめ、また教師よりも質問して、次の新字の讀方書方及び語句の内容を明かにする。

「ユフガタ」「日ガクレマシタ」「ウチ」「オバアサン」「火ヲタイテ」「ユフハン」「シタク」……等。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀方の練習をなす。

五、語句内容の吟味

語句内容につき一歩進んで吟味して、其の意義を一層明かにすると共に山里

に於ける夕暮の有様及び一家庭に於ける祖母の夕方の作業に對しても一層深く感得せしめる。

(注意)教授上の注意の部参照。

六、達讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また齊讀をもなさしめる。

七、練習應用

(1)漢字の書取。(2)假名遣の誤正。(3)語句の適用。
(注意)以上は前記教授上の注意の部参照。

第二時

一、掛圖觀察

掛圖を示し「これは誰。今何をしてゐますか」と言ふ問答の下に、復習的に、祖父・祖母・父母・友吉の夕方に於ける作業動作につき思想を整理する。

二、通讀

前習の所を一度復習し、それから本日の所を各自をして自由に通讀せしめる。

三、語句等の意義

次の語句の意義を問答によつて明確にする。

「オヂイサン」「ウマ」「カヒバ」「ヤツテキマス」「キドバタ」「水ヲクンデキマ
ス」……等。

(注意)前記教授上の注意の部参照。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀方の練習をなす。

五、語句内容の吟味

語句内容につき一歩進んで吟味し、其の意義を一層明かにすると共に、夕方に於ける祖父の仕事、母の作業に對しても一層深く感得せしめる。

六、達讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また齊讀をもなさしめる。

七、練習應用

(1) 漢字火・水の書取。(2) 假名遣の誤正。(3) 語句の適用。

(注意)以上は前記教授上の注意の部参照。

第三時

一、掛圖觀察

掛圖を觀察せしめて、祖父・祖母・父・母・友吉等の夕方に於ける行動につき復習的に思想の整理をなす。

二、通讀

1. 前習の所を復習的に一回讀ましめる。
2. 本日の所を各自をして一回通讀せしめる。

三、語句の意義

主要なる語句につき其の意義を明かにする。

「マダ」「山カラカヘツテ」「トモキチ」「シンバイシテ」「カド口」……等。

(注意)前記教授上の注意の部参照。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀方の練習をなす。

五、語句内容の吟味

語句内容を一步進んで吟味して、其の意義を一層明確にすると共に、夕方に於ける父母の動作に對しても一層深く感得せしめる。

六、達讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また一齊的にも讀ましめる。

七、練習・應用

- (1) 漢字火・水・山口等の書取。
 - (2) 假名遣の誤正。
 - (3) 語句の適用。
- (注意) 以上は前記教授上の注意の部参照。

第四時

一、全文の復習

- (1) 各節につき指名して讀ましめる。
- (2) 全文を一齊に讀ましめる。
- (3) 主要語句につき問答する。
- (4) 全文の内容につき問答する。

二、話方

次の要項に従つて話さしめる。

- (一) オヂイサンハ……………。

トモキチノイヘ
ノユフガタ

- (二) オバアサンハ……………。
- (三) オカアサンハ……………。
- (四) オトウサンハ……………。
- (五) トモキチハ……………。

(注意) 此の話方の裏に家族は五人で、各自がそれ〴〵に自分の仕事に勵み、一家和合して愉快に暮し居る状態をよく悟らしめる。

三、補習文の讀解

- (1) 通讀。
 - (2) 語句の吟味。
 - (3) 内容の玩味。
 - (4) 讀方練習。
- (注意) 補習文は別に時間をとつて授けてもよい。

備考

相模灘の落日——秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに世に斯る平和のまた多かる可しと思はれず。

日の山に落ちかかりてより、其の全く沈み終るまで三分時を要す。

初め日の西に傾くや富士を初め、相豆の連山煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼を細うせるにや。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。

日更に傾くや、富士を初め相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ。
此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる葉屑も、赫焉として燃えざるはなし。

已にして日愈、落ちて伊豆の山にかかると、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の巔舊によつて紫上更に金光を帯ぶるのみ。伊豆の山已に落日を衝み初めぬ。日一分を落つれば海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば願ひ勝に悠々として落ち行く。

已にして殘一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり——忽にして無矣。

眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。

日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも黄なるを見すや。偉人の没後實に斯の如し。

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、熾りたる樺となり、上りては濃き李藍色となり、日の遺孽とも思ふ明星の次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の日出を約するが如きを見るなり。(自然と人生)

第十一 カクレンボ

要旨

形式上—新漢字「上」「中」「下」の讀方書方。「カクレンボ」「ジャンケンボン」「オニ」「タレカ」「タハラ」「オモツタラ」「モノオキ」「エンノ下」「ミツカリマセン」等の語句の意義用法。「シマセウ」「マサヲ」「タハラ」「モノオキ」「エンノシタ」等の假名遣。及びかくれんぼの遊戯を對話法によつて敘述したる文章の讀解に習熟させる。

内容上—かくれんぼの方法愉快、注意及び友達同志が互に仲善く遊ぶことの情念を養ふ。

区分

- 第一時 第一段 至二十五頁終 三行形式及び内容の教授。
- 第二時 第二段 至二十六頁始 五行形式及び内容の教授。
- 第三時 第二段 至二十七頁一六行形式及び内容の教授(續)
- 第四時 全文の復習及び應用。

教具

讀本の挿畫を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、かくれんぼは都鄙の區別なく、この子供にでも興味を以て迎へられる一種の遊戯である。この一般に好きな遊びを材料にとつたことは普通の且児童的である。

二、本課は挿繪に於ても、文章に於ても、斧鉞を大きく振つただけ、舊讀本のよりも面目を新にして居る。殊に文章に於ては舊讀本には

「マサヲサン、ハツシヨ、ニコハカキネ、ハワキニカクレ、マセウ。」(女の發言)

「イイエ、ハツシヨ、ニキテ、ハイケマセン。」(男の返事)

とあつて、誠に不快な文字の羅列として眺めて來たが、修正の方では全部之を削除してある。修正の方ではお菊とお清とが一所に物置の中に隠れることになつて居る。併しこれは女同志であるから差支はない。文章の構想上から云へば、舊讀本は鬼の動作が中止法なるに對し、修正の方は全く完了したことになる。故に讀者の想像を動かす點に於て失色がある。構想上からは舊の方が面白いと思ふ。

三、本課を取扱ふには先づ掛圖について問答しながら、かくれんぼの方法につき其の大要を理解せしめ、それから讀本にうつつて授けることにしたらよい。

勿論讀本には其の方法が流れて居るけれども、第一次、第二次と繰返す方法に至つてはわからぬことになつて居る。故に茲に謂ふ方法の理會とは鬼と其の役目。隠れるものと鬼との間に存する約束。鬼及び隠れるものの動作。繰返す場合の注意等につき、其の大要に互つて整理することを意味するのである。

四、本課の内容については、児童の經驗、地方の習慣に従つて大體次の範圍程度の下に整理したらよい。

(1) 方法上

仲間同志から一人の鬼を選ぶこと。鬼は隠れたものを捜すのが役目であること。其の他のものは適宜の場所にかくれること。全體のものが隠れる迄は鬼は目を潰つて立つて居ること。全體は鬼が目を潰つてゐる間に可成早く隠れて仕舞ふこと。そして誰か一人「よろしい」とか言つて鬼に全體がかくれ終つたことを合圖すること。この合圖によつて鬼が目を開き、此處彼處に走り廻つて捜すにあること。斯くして全く捜し終つたとき、第一回が結了するのである。第二回は一番最初に見付つたものが、鬼となり、

前回の如く繰返すのである。第三回四回も同様である。
(2) 注意

作物を害せぬこと。物を取亂さぬこと。禁止の場所に入らぬこと。危険なる箇所又は不潔なる場所に入らぬこと。他人の妨害を爲さぬこと等。併し餘り教訓に偏し、かくれんば其の物の本質に背き、興味を殺滅するが如きことあつてはならぬ。兒童の過去の追想と相俟つて感興を惹き起すやう取扱ふがよい。

五、文字語句等については大要次に示す所に基き適切に取扱ふがよい。

「上」指事文字で古文では、「又」又は「上」と書く。「一」は一定の場所の意味で、「又」又は「一」は其の場所より高き意を示すのである。音は「シャウ」又は「ジャウ」で、訓は「ウヘ」「カミ」「ノボル」等である。運筆の順序は「一—一」である。

「下」指事文字で、古文では、「又」「下」と書く。「一」は一定の場所又は標準で、「又」又は「一」は其の場所標準より低き意を示すのである。音は「カ」「ゲ」で、訓は「シタ」「シモ」「クダル」「サガル」等である。運筆の順序は「一—一」である。

「中」會意文字で、何れにも偏らぬ真中の意を示す文字である。故に「一」を以て

「ロ」の中心を貫いて其の義を示してをる。音は漢音吳音共に「チュウ」で、訓は「ナガ」「ウチ」等である。運筆の順序は「口—」である。

「カクレンボ」カクレンバウがつづまつたのである。「アカンバウ」を「アカンボ」といふ類である。地方によつては「カクレゴト」「カクレンゴ」などいふ所がある。こんな所ではそれ等の語と交渉して其の意味を明かにするがよい。これが方法規約注意等については既に記した通りである。

「シマセウ」「マセウ」は未來時の詞である。「シマセウ」はおのれの決心をあらはして、他を勧誘するの意義を有する言葉である。

「ジャンケンポン」「ジャンケン」は「ジャンケンポン」とも言ひ、東京の方言である。即ち「イシケン」のことである。手を開いたのを紙、指二本を鉄、拳を石と定め、

場	合	勝	負
一人が鉄、他の一人が紙を出した場合	鉄	紙	
一人が紙、他の一人が石を出した場合	紙	石	
一人が石他の一人が鉄を出した場合	石	鉄	

といふ風に勝負をきめるのである。「ジャンケンポン」は「ジャンケンポイ」と同

じ意味であらう。「ジャンケンボイ」は時に其のかけ聲に用ひることもある。「オニ」かくれんぼでは、他の隠れたものを捜し出すある一人を要するのである。之を「オニ」といふのである。語原は彼の無慈悲にして恐るべき鬼即ち羅刹の轉じたものである。蓋し遊戯の際は他を追ひ、他を捕へ、他を捜す等鬼のやうな仕事をする所から、斯く名をつけるに至つたのであらう。

「ダレカ」「ダレ」は「タレ」の訛で、しかと知らぬ人の名に用ひる人代名詞であるが、茲では仲間の内の一人をさしてゐるのである。「カ」は言ふまでもなく、疑問の音を表はす助詞である。

「タハラ」普通藁をあみてつくり、米などを入れるに用ひる。茲は古俵を幾枚も一つにまとめて、之を縄でくくつて、小屋の傍に置いてあるものとして取扱ふがよい。

「オモツタラ」「タラ」は「タラ」(將然形)「テ」(連用形)「タ」(終止形)「タ」(連體形)「タラ」(假定形)の如く活用する詞で、此の場合では完了助動詞の假定形といふ譯である。適用によつて其の意味を明かにするがよい。

「モノオキ」物を置く所で、炭薪その他雜類を入れ置く小屋のことである。

「エンノ下」家の座敷の外側にある板張の下をいふのであらう。厄介な所に隠れたものである。友吉の隠れ場所について今少し考へて貰ひたい。

「ミツカリマセン」見出すことができなかつたのである。隠防をして見つからないと、鬼から其の旨をいふのである。即ち降参した體になるのである。さうすると見出されなかつた者が自身で出て來るのである。此處はその場合である。

六、本文の内容を玩味せしめるには大體次の要點に基き教師の感想をも加へて布行的に知らしめるがよい。

「カクレンボヨシマセウ」此處では隠防につき勸誘したる點につき。「ジャンケンボン」此處では鬼の選抜法につき。「サアマサヲサンガオニデス」此處では鬼が決定した點につき。「マサヲハイシノ上ニタツテキマス」此處では鬼の動作につき。「ミンナカクレマシタ」此處では他のものの動作につき。

「ダレカタハラノウシロニキルト……オキヨサンモキマス」此處では他のものの動作につき。「トモキチハエンノ下ニキタノデミツカリマセンデシタ」――終結につき適當に布行して知らしめる。

七、本課は讀振の指導をなすに恰好な所であるから、

「カクレンボラシマセウ」―普通の聲にて。「ジャンケンボン」―高聲に勢よく。
「サア、マサヲサンガオニデス」―普通より強く。「マサヲハイシノ上ニタツテキ
マス」―普通の聲にて。「ミンナガカクレマシタ」―普通の聲にて。「ダレカタハ
ラノウシロニキルトオモツタラ、タレモキナイ」―獨語であるから小聲に。「ア
ア、オキクサンガモノオキノ中ニキマス。オキヨサンモキマス」―此處は發見
した所であるから高聲に元氣よく。「トモキチハエンノ下ニキタノデ、ミツカ
リマセンデシタ。」―普通の聲に讀ませる。さうすると感情意志が明瞭に表現
され、其の實況がよくわかる。方法は教師先づ模範を示し、後兒童をして讀ま
しめるがよい。

八、文字・語句の練習・應用例

(1) 漢字の練習(書取法)

「上」―木ノ上	土ノ上	火ノ上	山ノ上	水ノ上……等。
「下」―木ノ下	山ノ下	月ノ下	ハシノ下……等。	
「中」―山ノ中	火ノ中	川ノ中	水ノ中	土ノ中……等。

(2) 假名遣の練習(書取又は正誤法)

「シマセウ」 「マサヲサン」 「タハラ」 「ダレモキマセン」 「エンノシタ」
……等。

(3) 語句の適用(填充法・書取法・短文作爲等)

「マセウ」―オキヤクアソビヲシテアソビマセウ。
「タツテキマス」―人ガハシノ上ニタツテキマス。
「カクレマシタ」―月ガクモノナカニカクレマシタ。
「キナイ」―コヤノナカニハタレモキナイ。
「ミツカリマセン」―犬ガドコヘイツタノカ、ミツカリマセン。

(4) 文形の適用

イ) ……トオモツタラ……。(ロ) ……ニキタノデ……。

九、補習文

○ ユフガタ

ユフガタ ニ ナリマシタ。オキクサン ノ ウチ デハ、ザシキ ニ
アカリ ガ ツイテ キマス。ミナサン ハヤク カヘリマセウ。ハヤク

カヘラナイ ト オトウサン ヤ オカアサン ガ シンバイ ナサイマ
ス。 マタ ユフハン ニモ オクレマス。

(乙) 教授の實際

第一時

一、掛圖觀察

掛圖により隱防の方法規約注意等につき、其の地方の風習とも交渉して思想を整理する。

二、通讀

目的を指示し、各自をして一回通讀せしめる。

三、語句内容の吟味

語句及び其の節の内容につき問答し、其の意味内容を明かにする。

「カクレンボ」「シマセウ」「ジャンケンボン」「オニ」……等。

四、讀方練習

個人的に齊唱的に讀方の練習をなさしめる。

五、語句内容の復演

語句及び單元の内容につき復演し、一層確實に理解せしめる。

六、達讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また全體としても齊讀せしめる。

七、練習應用

(1) 書取(口唱)

「カクレンボ」 「シマセウ」 「マサフサン」 「オニ」……等。

(2) 適用(填充法)

(イ) ……ヲシマセウ。 (ロ) ……ガオニデス。

第二時

一、復習

掛圖を提示し、隱防の方法規約注意等につき復習し、それから讀本につき前習の所を一二名をして讀ましめ、主要語句につき問答する。

二、通讀

目的を指示して、本日學ぶべき教材に對し、一二回讀ましめる。

三、語句内容の吟味

語句及び其の節の内容につき問答し、其の意義及び内容を明かにする。

「イシ、上」 「ミンナ」 「カクレマシタ」 「ダレカ」 「タハラ」 「オモツ
タラ」 「モノオキ」……等。

四、讀方練習

個人的に一齊的に數回讀ましめる。

五、語句内容の復演

語句内容につき復演し、一層其の意義内容を明かに理解せしめる。

六、達讀

四五の兒童を指名して讀ましめる。また一齊的にも讀ましめる。

七、練習應用

(イ) 假名遣(誤正法)

「マサオ」 「タツテイマス」 「タワラ」 「キルトヲモツタラ」 「モノヲキ」
「ヲキヨサン」……等。

(ロ) 語句の適用(填充法又は短文作爲)
「タツテキマス」 「カクレマシタ」 「オモツタラ」 「ミンナ」……等。

第三時

一、復習

前習の所を一二名をして讀ましめ、主要語句につき其の意味等を問答する。

二、通讀

本日の所につき、各自をして一二回讀ましめる。

三、語句内容の吟味

次の語句につき其の意義を明かにする。

「トモキチ」 「エンノ下」 「ミツカリマセンデシタ」

本日習つた所につき内容を理解せしめる。

四、讀方練習

個人的にまた一齊的に讀方の練習をなす。

五、語句内容の復演

六、達讀

語句内容につき更に復演して、其の意義内容を一層確實に理會せしめる。
本課の初めから全文にわたつて、個人的に二三名、また一齊的に一二回讀ましめる。

七、練習應用

- (1) 漢字の書取(口唱)
「上」「中」「下」につき書取らしめる。(教授の注意部参照)
- (2) 語句の適用(填充法又は短文作爲)
「キタノデ」 「ミツカリマセン」 「ミツカリマセンデシタ」……等。

第四時

一、復習

- (1) 全文を一二回讀ましめる(一回個人に、一回一齊的に)。
- (2) 主要なる語句につき問答。

二、内容の玩味

教授の注意部に示した要項につき、教師の感想をも加へ布衍的に其の内容を玩味させる。

三、朗讀

四五名を指名して朗讀せしめる。(此の際讀振につき指導する)

四、話方

- (1) 隠防の方法につき。 (2) 規約につき。 (3) 注意につき。

五、練習應用

- (1) 漢字練習(口唱書取)
「木ノ上」 「水ノ中」 「山ノ下」
「アンビマセウ」 「エンノシタ」 「タハラ」
- (2) 假名遣(口唱書取)
- (3) 文形の適用。
(イ)……………トオモッタラ……………
(ロ)……………ニキタノデ……………

六、補習文の讀解

- (1) 通讀。 (2) 語句内容の玩味。 (3) 朗讀。

備考

隠防は古くから行はれてゐる遊である。宇津穂物語、榮華物語にもつて居る。名稱も「かくれあそび」「かくれんこ」「かくれんぼ」「かくれんぼ」など種々ある。遊戯については、兒童の體的餘裕によるものといふものもあり、只愉快を求めるためになすものであるといふものもあり、全く本能に基くものであるといふものもあり、又原始時代の漁獵遊牧の遺傳といふものもあるが、要するに遊戯は兒童の自發活動に基き、之に對し強烈な快感を有し居ることは事實である。於茲教師は此の活動性を適當に指導し、兒童の特權を伸長してやるといふ態度に出づれば、兒童の幸福は甚大である。故に本課に於ても、此の精神の下に取扱ふといふことは甚だ大切なことであると思ふ。

第十二 イシヒロヒ

要旨

形式上——新漢字「石」「田」の讀方意義。「イシヒロヒ」「ハタケ」「イラツシヤイマス」「マジツテ」「サクモツ」「ウラノ田」「ナガイアヒダ」「川ムカフ」「ヨク」「ナゲコム」「コマル」等の語句の意義用法。「イシヒロヒ」「アヒダ」「サウデス」「ムカフ」等の假名遣。及び老人の石拾について記した文章の讀解に習熟せしめる。
内容上——作物と土壤との關係。勤勞と家産との關係について知らしめ、傍ら勤

勞的精神の養成を以て要旨とする。

區分

- 第一時 第一節 自二十八頁七行 形式及び内容の教授。
- 第二時 第二節 自二十九頁一行 形式及び内容の教授。
- 第三時 第三節 自三十頁六行 形式及び内容の教授。
- 第四時 全文の復習及び應用。

教具

挿繪を擴大したる掛圖。

教法

(甲)教授上の注意

一、本課は新加の材料である。兒童にはさう歓迎せられる材料でない。併し讀本に用ひる材料は悉く歡迎的のものでなければならぬといふことはない。教育的見地からして、兒童にすかぬとも、責任感を以て讀ましめるものも多くある。此の種の如きも其の一つと見てよい。本課は材料の性質上から見ても、實業思想の鼓吹にも關係あれば、道德的思念の養成にも交渉して居る。

二、本課の要求は文の内容から考へて、農業思想の一端即ち作物と土壤との關係、勤勞を貴ぶの精神、勤勞と家産との關係について知らしめ、傍ら子供の時代によく有勝な惡風即ち田畑に石や瓦のかけを抛込む惡戯に對し教訓を加へ、之が矯正の舉に出でんとするのである。本課は此の要求の下に取扱ふことが最も至當と思ふのである。

三、本課の内容は太郎がいまがたお祖父さんから聞いた話をお祖父さんの仕事を見ながら友達に話して居る場合として取扱ふことが適當と思ふ。そこで先づ掛圖につき、

此處はどこですか——島。

此處にゐるのは誰さんか——太郎のお祖父さん。

今何をしてゐるのでせう——島の石を拾つてゐる。

と云ふやうに簡單に問答し、

「今日學ぶ所は此のお祖父さんが石を拾ふ譯などにつき太郎さんに話され、たその話について書いたのであるから、今から読んで知ることにしませう」と告げて一讀せしめ、主要語句について其の意義を明かにし、二三回讀ましめ

た後次の如く形式に即して内容を吟味し十分理會せしめる。

「オヂイサンガハタケノ中ノ石ヲヒロツテイラツシヤイマス」これは太郎さんの言つた言葉で、太郎さん方のお祖父さんと太郎とは大仲善で、太郎さんはいつもお祖父さん——と言つて慕つてゐるし、お祖父さんもまた太郎坊——といつて愛して下さいます。今日は日曜日で太郎さんは朝からお祖父さんと共に家の前の畑に出て、お祖父さんが石を拾ひながら聞かせて下さるお話を聞き、自分も亦石を拾つたりして、お仕事の手助をしてゐるのである。その畑といふのは元家が建つてゐたのであるが、その家の主人は家の仕事に精を出さない所から、澤山の借金が出来て、とうとう親譲りの家も地面も人に賣つてしまつたのである。太郎さんの家では其の地面だけを買つたのである。そして畑にするつもりで、お祖父さんが毎日々々出てこんな風になつて土を掘つて石や瓦のかけを拾つていらつしやるのである。此處へ太郎さんのお友達が遊びに来て、君、君のお祖父さんは何をしていらつしやるの」と問うたから、太郎さんは「お祖父さんは畑の石を拾つていらつしやいます」といつたのである。「石ガマジツテキルト、サクモツニワルイカラデス」これも太郎さんが言つた

言葉なので、お友達が「なせ拾ふの」と問うたから、太郎さんは「石がまじつてゐる」と作物にわるいからです」と答へたのである。作物といふのは畑に植ゑる大根とか、芋とか、牛蒡とか、葱とか、麥とかをいふので、これ等は石のある所では、思ふままに自分の根を土の中にさしいれて、土の中から自分の養分になるものを吸ひ取つたり、また水分を吸ひ取つたりすることが出来ない。従つて立派に大きく育つことが出来ないから、お祖父さんは、そのじやまものになる石や瓦のかけを拾ひとつて棄てる譯なのである。

「ウラノ田ニモ石ガタクサンアツタノヲ、オヂイサンガナガイアヒダニヒロツテ、オステニナツタノダサウデス。」これも太郎さんがお友達にいつた言葉で、太郎さんの家には田もたくさんあるし、畑もたくさんあります。なんでも太郎さんの村では一、二番といふ身代である。之もこのお祖父さんが若いときから、親から譲られた田地を大切にし、其の上朝まだ太陽の昇らぬ前に起きて野に出て働き、夕方には全く日が暮れてお月様が出た頃に家に歸るといふ風に、せつせと働いたものであるから、身代はずん／＼殖えて、今は村で一、二を争ふ身代になつたのである。我が家の裏にある田も、元は他所の人の持分であ

つたが、お祖父さんが買つて、始めは畑にし、それから後に田にしたのである。その畑であつたとき、石や瓦のかけが多くあつたのを、お祖父さんが永くかかつて、のこらすこれを拾ひ、今は良き田として、毎年お米がよく出来ることになつたのである。

「ツイムカフノ田ヘハ、コドモガヨク石ヲナゲコムノデコマルト、オヂイサンガオツシヤイマシタ。」之も太郎さんがお友達にいつた言葉で、太郎さんの家の前に川があつて、其の向ふに祖先譲りの田があるのである。太郎さんの家の田のみでなく、他所の家の田も並んでゐる。そして川の土手は往來になつてゐるので、隣の村の子供が學校へ通ふには、常に此處を通る事になつてゐる。春には此處等一圓の畑に麥を作るから、雲雀がチュウ／＼と鳴上るともある。秋になると稲穂の上に雀が群つてゐることもある。冬には鴨の下りてゐることもある。こんな時には、學校の子供が其の往來に石をとつて投げるから、田の中には澤山石があるのである。お祖父さんが之を毎年拾つては棄ててゐるが、一遍になんでも箆に一杯もあるさうである。これには心の善いお祖父さんもたいそうおこつていらつしやるのである。このことをお祖父さん

が太郎さんに話されたものだから、太郎さんがまたお友達に話したのである。石を投げるといふことは、よく子供時代にあることであるが、これ等は甚だ悪いことであるから、決してしてはならぬ云々。

四、文字、語句については大要次に示す所に基き適切に知らしめるがよい。

「石」象形文字で、尸(厶)の下に口(石の形)の横たはつた形を示したものである。即ち山の石である。漢音は「セキ」で、吳音は「ジャク」習慣音は「シヤク」で、訓は「イシ」である。運筆の順序は「一ノロ」である。

「田」象形文字で、禾穀を植うる耕地である。口は四方の境界で、十は東西南北に通ずる路に象つたのである。漢音は「テン」、吳音は「デン」で、訓は「タ」である。

「オヂイサン」前出。併しおぢいさんは轉じて一般に老人を呼ぶにも用ひるから、茲では「他人の老人」とも「我が家の祖父」とも見られる。併し本文の内容上から、また兒童の親しみの上から、我が家の「オヂイサン」とする方がよい。

「ハタケ」「ハタ」同じ。野菜などを作る所である。此處は屋敷跡を開墾して畑にするの意を以て取扱ふがよい。

「イラツシヤイマス」「オイデナサイマス」と同じ。「イラツシヤイ」は「イラセラレ

の約轉である。「マス」は敬語助動詞の終止形である。

「サクモツ」畑に作る大根、芋、牛蒡、葱、茄子、麥等をいふのであると知らせる。

「ウルイカラデス」「カラ」は他の事の原因又は理由となる意を示す助詞である。

「石がまじつて居ると作物にわるいから、それで取りのけるのである」といふ意味になる。これ等は適用によつて理會せしめるがよい。

水ヲヨケイノムト、カラダガワルクナルカラデス。

木ノハノトブノハカゼガフクカラデス。

オカアサンガシカリナサルノハ、ワルイコトヲスルカラデス。

「ウラ」表に對する詞である。茲は我が家の後といふ意味にとるのがよい。

「田」稻、麥を作る所として知らしめる。文中に漢字として田と畑とを提出したことは觀念聯合の上からである。

「ナガイアヒダ」二三年の意味に取扱ひ祖父の繼續的勤勞をよく味はせる。

因に記するが「石のある田」とは、元屋敷跡であつたところを田にしたとか、或は山をくづして田にしたとか、或は大水のために堤防が決潰して石が流れこんだ田とかである。故に此處は勤勞の繼續と家運の隆替との關係を暗々裏に

知らしめるために、元他人の屋敷であつたが、之を買つて田にし、之を善き田にするまで永くかかつて石を拾ひとつたことにするがよい。
「川ムカフノ田」老人の家の前に川があつて、其の向ふにある田として取扱ふがよい。

「イシヲナゲコムノデコマル」ナゲコムは手で石をなげ入れるのである。「ノデ」は用言及び助動詞の第四活段又は第三活段に附いて、一つの事が他の事の原因若くは理由となる意を示すの助詞で、「コマル」の原因又は理由を明かにして居るのである。適用によつて十分理會せしめるがよい。子供が石を投込む理由は川の土手が往來になつてゐて、隣村の子供が學校に往來する通路に當つて居る。此等の子供が通るとき、雲雀が居つたり、鳥が居つたり、雀が居つたり、鴨が居つたりすると、それに向つて路上にある石をとつて投込むことにする。而して茲に此の行爲は甚だよくないことを十分論すがよい。
「オツシヤイマシタ」オツシヤイは「オホセラレ」の約轉で、「マシタ」は敬語助動詞で、時の上からは完了である。適用によつて十分其の意味を理會させるがよい。

五、練習應用例

(1) 漢字の練習(書取)

「石」石田。 大石。 石川。 石山。 小石……等。
「田」田中。 土田。 山田。 上田。 下田……等。

(2) 假名遣(書取法誤正法)

「イシヒロヒ」イラツシヤイマス。「マジツテ」ナガイアヒダ。「オステニナツタヤウデス」川ムカフ。「オツシヤイマシタ」……等

(3) 語句の適用(書取法填充法短文作爲等)

「ヒロツテ」コドモガ石ヲヒロツテキマス。
「イラツシヤイマス」オカアサンハセンタクヲシテイラツシヤイマス。
「マジツテ」アライマツノアヒダニ、アカイモミヂノマジツテキルノハ、タイソウキレイデス。
「アルイカラデス」オトウサンハハタケノクサヲトツテキマス。ソレハサクモツニワ、ルイカラデス。
「ナガイアヒダ」オトウサンハナガイアヒダ、オルスデアリマシタ。